
軋み始めた歯車（ 救世主始めましたシリーズ続編

西の旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軋み始めた歯車（ 救世主始めましたシリーズ続編

【Nコード】

N53350

【作者名】

西の旅人

【あらすじ】

前作救世主始めましたの続編タイトルです。

前作を読まれて無い方はまず前作、救世主始めましたをお読みください。

玄竜騎士（前書き）

前作救世主始めましたの続編タイトルです。
前作を読まれて無い方はまず前作、救世主始めましたをお読みください。

玄竜騎士

翌朝、孤児院に意外な客が訪れていた。

「チーッスッ」

孤児院の玄関前で大剣を背負った女性が中の人間を呼ぶように声を上げた。

その隣には魔導士風の女性が同じように立っていた。

「おはよう二人とも、こんな朝早くからどうした？」

その声に呼ばれるように割烹着姿の静音が現れ二人に言った。

「……煉耶は起きているかしら？ 静音」

魔導士風の女性は不機嫌そうに静音に問い掛けた。

「まだ、寝ているが……煉耶に用事でもあるのか？ セニア」

「なんか、一緒に学園に通うようにって、おばさんに言われたらしいよ？」

大剣を背負った女性がつまらなそうに補足した。

「……陛下が？ 通うのは良いと思うが……セニア、何かあったのか？」

「べつ別に、何も無いわよ！ 上がらせて貰うわ」

セニアは態度を変えぬまま吐き捨てるように言っと中へ入っていた。

「ごめん、何か朝からこんな感じださ」

「構わぬ、あやつのヒステリーは今に始まったわけではないからな。しかし、エミリアお主も大変だな」

静音はそう言って苦笑した。

「まあね。あいつああ見えて照れ屋だからさ。おばさんに何か吹き込まれたんじゃない？」

「吹き込まれた、か。まあ、良い。中へ入れ。茶を煎れよう」

静音はそう言っとエミリアを中へ招き入れた。

*

エミリアを連れ居間に戻るとナガトが一人で御茶を啜っていた。
「子供達はどうした？」

静音は一人御茶を啜っているナガトに問い掛けた。

「朝ご飯食べ終わって部屋に戻っていききましたよ」

ナガトは静音の問い掛けに御茶を啜り答えた。

「そうか、すまん」

「いえいえ、少し騒がしくなりそうでしたから」

「……なんで、あんたが此処に居るのさ？」

エミリアは椅子に腰をかけながら何食わぬ顔で居るナガトに問い掛けた。

「護衛だよ。鞍佐波殿のね」

「……静音と同姓じゃなく？」

「――ぶはっ。それでも僕、妻子持ちなんだけど？」

ナガトはエミリアの突拍子も無い問い掛けに思わず御茶を拭いてしまった。

「そんな事で動揺するとはまだまだだな、ナガト」

静音は何食わぬ顔でエミリアに御茶を差し出して自分も席についた。

「まだまだだね、ナガト」

「君に言われたくないよ、エミリア。でも、セニア様を部屋に行かせて良かったんですか？」

「どうしてだ？」

「……今朝方、シルヴィアに威嚇されていませんでしたっけ？」

「――あ、そういえばそうであったな……」

静音は今思い出したと言わんばかりに跋扈そうに言った。

「シルヴィアって？」

「煉耶殿と契約した精霊だよ」

「へえ、でも、煉耶と契約している精霊がどうして静音を威嚇するのさ？」

エミリアは御茶を一口飲み不思議そうにナガトを見て問い掛ける。

「まあ、エミリアがイメージしているような精霊じゃないからだよ」
「……よくわからないんだけど、安眠を妨害されちゃだめって事？」
エミリアは何処か拗ねたように問い掛けた。

「静音様、煉耶殿は明方まで起きていたようですし、無理に学園に行かせるのはどうかと思いますが？」

エミリアの問い掛けに答えるようにナガトは静音を見て言った。
「もう手遅れだろうよ。そう思うならば、何故セニアを止めなかった？」

「……そうですね、僕にも責める資格はありませんね」
ナガトは言葉とは裏腹に複雑な表情を見せた瞬間だった。

「——ぐわオオオオオオオオオオオオオオオオオオん！」
「いやあああああああああああああ！」

地響きのような遠吠えと同じくして少女の叫び声が屋敷内に木霊した。

その声の主は程なくして静音達の前を走り去り中庭へと逃げていく。

それを追うように白銀の狼が同じように中庭へと走っていった。

「……煉耶の精霊って狼なんだ」
半ば呆然としながら辛うじてエミリアはそう呟いた。

「うん、そうなんだ」
呆然としている静音の代わりにナガトは答えた。

が、その視線は中庭でシルヴィアから逃げ回っているアルセニアに向いていた。

（……どうしたもんかな）

「今日は、何の嫌がらせだ？」
ナガトがそう思案していると寝起き……というより無理やり起こされたと言った感じの煉耶が居間に現れ呟いた。

よく見ると片目の瞼が痙攣を起こしもう片目は半目も開いていなかった。

「おはよう……とは、言いがたいな。大丈夫か煉？」

寝ぼけているのではないかと勘違いしかねない煉耶の状態に静音は控えめに問い掛けた。

「……大丈夫に見えるか？」

煉耶は若干怒りを滲ませつつ呟いた。

「朝から押しかけて悪いね。セニアがあんたを学園に連れて行くつていつてさ」

エミリアは煉耶の惨状に申し訳なさそうに言った。

「なんでこう厄介事しかやってこないんだよ……」

煉耶は誰に言うわけでもなく疲れたように呟くと部屋に戻っていった。

「——ナガト、シルヴィアを止めて来い。私は朝餉の準備をする」
「御意」

ナガトは短くそう呟くと中庭へ駆けていった。

「……なんか、色々ごめん」

身支度を整えに部屋に戻ったであろう煉耶を後目にエミリアは跋悪そうに静音に言った。

「それは、煉に直接言っちゃってくれ」

静音もまた心中で浅はかだったと思っているのか、何処か跋悪そうに朝食の準備にとりかかっていた。

玄竜騎士（後書き）

書きたくなって書きちゃった。後悔はしている。反省はしない！

玄竜騎士 その2（前書き）

ちよつと短めです。

玄竜騎士 その2

朝食を終え既に孤児院を後にした煉耶達は学園に向っていた。煉耶の隣には当たり前のようにシルヴィアが付き添っていた。

そんなシルヴィアに怯えているのかアルセニアとエミリアは若干距離を置き続いていた。

ナガトとはというと、その中間に位置するよう煉耶の後ろを歩いていた。

（なあ、シルヴィア。何でついてきてるんだ？）

煉耶は何気なしに隣に居るシルヴィアに問い掛けた。

（お嫌でしたか？）

（そうじゃないが、子供達の相手をしていて欲しかったかな）

（マスターをお守りするのも私の役目です。今朝の狼藉者のような事は起こさせません）

シルヴィアはそう言うたちらりと一瞬だけ後ろに振り向いた。

（……まあ、いいか）

お前にも非があると思うんだがと、言おうとしたが煉耶は胸中でそれを飲み込んだ。

「何で離れているんだ？ シルヴィアなら別に襲わないぞ？」

シルヴィアに続き煉耶は振り向き離れているアルセニア達に言った。

「セニアがビビッてるんだよ」

「ビビッてなんかいいわよ！ あんな狼の一匹や2匹くらい私の魔法で——」

エミリアの煽りに喰ってかかるようにセニアは勢いで言うが、
「ガルルルウウウ！」

既に攻撃体勢に入っているシルヴィアが目に映り言葉が続かなかった。

（……またかよ）

余程アルセニアが気に食わないのか、シルヴィアは再びアルセニアに襲いはじめた。

その光景に煉耶はゲンナリして溜息を吐いた。

「いつ今のは冗談よ、冗談。てか、ノーカンだって！ ノーカン！ 嫌あああああ！」

襲い掛かってきたシルヴィアにアルセニアは叫びを上げ学園とは逆方向に走り逃げていった。

「何か騒がしくてわるいね」

一連の光景を面白く傍観しつつエミリアは煉耶に近づき言った。

「なんというか、若返った気分だよ」

「そりゃよかった。あんた歳幾つなの？」

「24だ」

「あら、ナガトよりも年上なんだ」

「ナガトは幾つなんだ？」

「ん？ 僕はエミリアと同じ20だよ」

ナガトは煉耶達に近づき言った。

「俺が、最年長か。あの砂利娘は幾つなんだ？」

「砂利って、確かに騒がしい子だけど、そんな風に言わないでくれないかい？」

「素直な感想なんだがな、悪かった。で、幾つなんだ？」

「……19だよ」

詫びているように見えない煉耶の言動に少し不満げにエミリアは答えた。

「なるほど、合点がいった」

煉耶は今朝の一連の騒動思い出し納得したように言った。

「何が？」

「アルセニア、友人少ないのではないか？」

煉耶はエミリアの問いに答えるように問い返す。

「よく解るね。あの子家柄のせいかな、性格のせいかな、人が寄り付かないのさ」

「だろうな、8割方性格のせいだ。もう少し色々と経験が必要だろうよ」

「ふーん、わかったような事いうんだね。それはそうと、目どうしたの？」

エミリアは相手を煽るかの如く嫌味っぽく言った。

「ま、それなりに苦労してるからな。で、眼鏡の事か？眼鏡の事なら悪いが答えられん」

「訳ありって事ね。ナガトは知ってるの？」

「一応ね、細かい事は知らないけど……」

ナガトは煉耶に説明を求めるように見て言った。

「ん？例の能力を封じる効果があるんだよ。あ、これ掛けてる時は普段の3割減だから、護衛よろしくな」

煉耶は特に気にしてないようにさらにと言った。

「それは僕を信頼しているって事？」

「友人を信頼しない奴がいるかよ」

煉耶今更何を聞いているのだといわんばかりに言った。

「——っ！有難う。でも、感知できるでしょ？」

煉耶の意外な言葉に一瞬目を丸くしナガトは言った。

「それがな、結構距離が近くないと完全に感知できないようだな」

煉耶は困ったように苦笑してナガトの問いに答えた。

「わかった。任せてくれ」

煉耶が信頼を寄せてくれた事にナガトは笑みを浮かべ頷いた。

「あのさ、今の話あたしが聞いても良かったの？」

「たいした話じゃないからな。ところで、俺達が受ける講義は何なんだ？」

「あー言ってなかったね。実技の戦技過程、講師はレティシア教官だよ」

エミリアは忘れてたという表情をして言った。

「成る程。本当、面倒事ばかりだな」

エミリアの言葉に煉耶は疲れたように溜息を吐いた。

「……何かあったの？」

その様子にエミリアは分けがわからず反応に困りナガトに問い掛けた。

「色々あるんのさ、直ぐにわかるよ」

エミリアの反応にナガトはそう言っただけで煉耶を憐れむように苦笑した。

（やれやれ、今朝の騒動はこのフラグか。本当、地雷ばかりだな）
煉耶はレティシアとの対決の予感に心中でそうぼやかずにはいられなかった。

玄竜騎士 その2（後書き）

色々作業をしているのでしばらくこんなペースになると思います。

玄竜騎士 その3（前書き）

ちょっと少なめです。

玄竜騎士 その3

アークティカ皇城の中の一室、皇国軍総軍団長室。

厳かな空気の中初老の男は時々頭を掻きながら気だるそうに書類仕事に励んでいた。

そこへ、一つの光が舞い込む。

が、現れた光の球体を特に気にすることなく初老の男は淡々と仕事をこなしていた。

「今日は何の用じゃ、ライ？」

光の球体が人の形を取り始めたところで初老の男は書類に目をやったまま声をかけた。

「ちよつとした報告と世間話ですかね。しかし執務中とは珍しいですね、レーベン団長？」

ライはレーベンの仕事ぶりを珍しそうに観察していたが、机上山となっている書類が目映り肩をすくませ苦笑した。

「いやまったくじゃよ。鼻息の荒い何処かの誰かさんに意気揚揚と仕事を押し付けられてな、飛んだ災難じゃ」

レーベンは書類から目を離しライを見る。

「大変ですねえ」

ライは傍にあった椅子に腰をかけた。

「それで、報告というのは？」

「鞍佐波煉耶が現れました」

「知っておるよ。目下書類の山はその坊主のせいじゃからな」

そう言つてレーベンは溜息を吐く。

「……何かあったのですか？」

ライはおおよその見当はついたと笑みを浮かべ問いかける。

「煉坊が学園に来るそうじゃ、しかも戦技を受講しにな」

「今更、煉耶君が戦技を受ける必要はないと思いますけど？」

「まったくじゃ。今朝早くセニア様が煉坊を起こしに行ったそうじ

「や」

と、溜息を吐きレーベンが続ける。

「それを聞いてレティシアの奴が今朝方、後は任せた！」と嬉しそうに書類の山を投げて、嬉しそうに去っていった。……」

レーベンは今朝方の光景を思い出しのか、溜息を吐きゲンナリした。

「それはまた、災難でしたね。でも、彼は戦技を本当に受講するんでしょうかね？」

「それはわからん。じゃが少なくとも、レティシアの頭の中では、セニア様と一緒に講義を受ける、即ち私のところに来る、即ち私と戦いたい。ということになっておるんじゃないよ」

そう言っただけでレーベンはまた溜息を吐いてゲンナリする。

「……ははっ」

レーベンの落ち込みぶりにライは苦笑いする。

「あ奴は龍族のくせに頭は脳筋じゃからな、アリシアが不憫じゃよ。それはそうと、報告はそれだけじゃなかるう？ ライツファルト將軍」

レーベンは表情を少し引き締めライに問い掛ける。

「ええ、事後承諾になりますが、警戒レベルを少し引き上げました」「うーむ。相手方の動向は？」

「数日前から帝国に小規模な動きが見られています。恐らくこちらの動き察知した上の動きでしょう」

「ふむ、ライ。煉坊が現れた時、ネルアークハイムに現れた魔神は何が目的だったんじゃないかな？」

「やはり団長もお気づきでしたか、確かにネルアークハイムに現れた魔神には不自然な点が多すぎます」

「軍事侵攻であれば一体ですむ話ではないからのう。鞍佐波煉耶を狙ってきたとしか考えられん」

「ええ、問題なのは帝国が何故、知っていたかです」

「鞍佐波煉耶の登場、レイルですらわからん事を奴らはわかってい

た。いや、気づいたと言っべきか」

「そうですね……彼と同じように我々も不明確な点が多いですね」

ライはそう言って溜息を吐き、頭を掻いた。

「ふーむ……そもそも帝国は何故ワシらを滅ぼさんのだろうな？」

「そうですね、五年前もそうでしたが、その気になれば滅ぼせるはずなんです……」

「幾らワシらのような特殊な存在がおつても戦力差は覆せんからな、加えて向こうには神話の彼方からやってきた魔神達がおる。帝国がワシらを生かす理由はなんじやろうか？」

「それが解れば手のうちようがあるのですが……」

「そうじゃな。恐らく見当がついている奴が一人いるが聞く気にもならん」

「レイル殿ですね」

「うむ。ワシは未だにあやつの事を好きになれん」

レーベン頭を掻いて苦虫を潰したように言い、続ける。

「そもそも事の発端は、あの馬鹿たれがアークティカを滅ぼしたせいなんじゃぞ？」

「初耳ですね。帝国に滅ぼされたのでは？」

「確かに結果で見れば帝国が滅ぼしたのには変わらない。じゃが、そのきっかけを作ったの奴なんじゃぞ？ あいつの我俣で先女王陛下を失った挙句、勝手に絶望しやがって。全部自分で種を巻いておきながらな！」

レーベンは当時を思い出したのか徐々に怒りのボルテージが上がっているかのように声が粗ぶっていく。

「ワシはな、未だに思うんじゃ、奴はまだ何処かで人という種族が滅ぶべきじゃないかと思っておるのではないかと」

「確かに、彼から見れば我々が愚かで蒙昧な種族だと思われても仕方ないでしょう。だからと言って彼の立場から考えれば結論を出すのは早すぎる」

「ワシもそう思う。我々が文明を築き始めてまだ数千年程度しか経

つておらんからな。そもそも本当に世界は滅びかけておるのか？」

「まあ、実感は湧きませんね」

「奴が言うには勇氣と愛の座が消滅しておるといふ話じゃが、本当に消滅したのか？ 奴はそれを確認したのか？ ワシには俄かに信じられんよ」

「疑ったら限がありませんよ。我々では確認のしようがないのですから」

ライは苦笑してそう言う。結局の所、信じるほかないのだ。

「それもそうなんじゃがなあ……ワシもそろそろ引退するべきかもしれんなあ」

ぼやく事が多くなってしまったと、レーベンは溜息を吐く。

「それは勘弁してください。貴方が居なくなったら軍をまとめる者が居なくなります」

「お主がおるじゃろ、ワシも楽隠居したいんじやよ。このままだとギヤムジー達との約束が果せなくなりそうなんじやよ」

「良く言いますね、貴方がギヤムジー殿と酒盛りをしているとよく耳にするのですが？」

「ぬう、バレテおるか」

「約束が何か存じませんが、立場以外既に隠居しているようなものじゃないですか」

「隠居しておるなら、こうやって仕事を押し付けられる事はないはずなんじゃがなあ……」

「お気持ちはわかりますが、私が前線から離れてしまったら必要な場合戦線を維持する事が難しくなります。フェルトだけでは少し荷が重いですから」

「それもそうじゃのう。因みに約束というのは陛下とギヤムジーと3人で酒盛りすることなんじやよ」

「変なところで妙な事言わないでもらえませんか？」

ライは苦笑して問う。変な事をいわないでくれと。

「もし、ワシが果せなんだなら、代わりに出席してやってくれ、ラ

「イ」

「柄にもないことを……貴方を倒せる相手なんてそうはいないでしょう」

「わからんぞ、先に老いでくたばるかもしれん」

遠くを見るようにレーベンは言う。その瞳には何故か寂しさが映っているように見える。

「団長……」

と、ライが言葉を続けようとしたところで、`コンコン`と、タイミングよくドアがノックされた。

「失礼します。閣下、会議のお時間です」

扉を開け、淡い緑色の髪の失明しているのか目を閉じた女性が部屋に入り言った。

「もうそんな時間か。すまん、アリシア」

「お久しぶりですね、アリシア殿」

「はい。ライツファルト殿もご健勝で何よりです」

「やれやれ、脳筋娘のお陰で数年振りに本会議に出る事になるとはのう……」

「本来ならば閣下も同席しなければならぬもののはずですが？」

「そうじゃったかのう？ 歳をとると物忘れがひどくてのう」

「閣下、怒りますよ？」

アリシア笑みを浮かべ言う。その雰囲気には明らかに怒気が込められている。

「とつところで、アリシア殿。目はどうされたのですか？」

話をそらすようにライはアリシアに問い掛ける。

「どつという意味でしょうか？」

アリシアは首をかしげるように言う。

「なんじゃライ。知らなかったのか？ アリシアは元から目が見え

んのだぞ？」

「私の記憶が確かなら、アリシア殿の目は見えていたはずですが？」

「その記憶に間違いはありませんわ。私は魔法を使っている時だけ

目が見えるのです」

「アリシアの保有する大量のマナのせいだな、普段は目が潰されておるんじゃない」

「なるほど、マナを発散している時だけ見えるというわけですか」

「ええ、その通りです」

「知らなかったとはいえ、失礼な事を聞いて申し訳ない」

ライは椅子から立ち上がり頭を下げていった。

「お気になさらないください。閣下、そろそろ行かないと会議のお時間が……」

アリシアは笑み浮かべ言った。

「そうじゃったな、行くとするかの中」

レーベン は面倒くさそうに立ち上がそう言っ てアリシアと共に部屋を後にした。

ライルフアルトもまた二人を見送り部屋を後にした。

玄竜騎士 その3（後書き）

更新が遅くもうしわけないです><

玄竜騎士 その4（前書き）

ちよつときりがよかったので先に投稿しておきます。

玄竜騎士 その4

学園に着いた煉耶達はエミリアの案内で闘技場に来ていた。

「本館の傍にあつたんだな、ここ」

隣を歩くエミリアに呟くように煉耶は言う。

「ん？ 使った事あるの？」

「まあな。思い出したくないから細かい事は聞かないでくれ」

煉耶はミレニアとの戦闘を思い出したのか、憂鬱な面持ちで頷いた。

「……なんとなく予想が付いたよ。ナガト、セニア達は？」

「え？ まだシルヴィアに追われてるんじゃないかな？」

二人の後ろに居たナガトは特に気にする素振りもなく答える。

「煉耶、そろそろ勘弁してやって欲しいんだけどさ？」

「ん？ ああ、すまん忘れてた」

（シルヴィア、セニアを連れて戻って来い）

煉耶はそう答えるとシルヴィアに念話を飛ばす。

（はい、マスター）

「直ぐ来るそうだ、此处で待つか？」

シルヴィアの返答を受け取ると煉耶はエミリアに問い掛ける。

既に煉耶達は闘技場の入り口付近まで来ていた。

「うん、セニアが居ないと教官に何言われるかわからないからさ」

エミリアが答えると間をおかずシルヴィア達が光を帯びて目の前に現れた。

シルヴィアの背中にはセニアは何が起こったかわからないという面持ちで座っていた。

が、それも一瞬の出来事で、現れたと同時にシルヴィアは溶けるように光に消えセニアはそのまま尻餅をつくこととなった。

「痛い、なんであたしがこんな目に合わなきゃいけないのよ……」

セニアは煉耶達の目の前でばやきながら立ち上がった。

「あんたが余計な事言うからだろ、自分で種まいといてばやくんじやないよ」

「うつうるさいわよエミリア！ 元を辿れば煉耶が狼飼っているのが悪いのよ！」

セニアは啖呵を切るように煉耶に言うと、キツと睨みつけた。

「ほう、そこで俺に転嫁するか。面白い発想をしているな、お前」

（出てこなくて良いからなシルヴィア）

（わかりました。マスター）

煉耶は念を押すようにシルヴィアに言い面白そうにセニアを見る。

「ちょ、セニア。あんたの頭には学習するって言葉はないの？」

エミリアはまたかよと言いたげにセニアに問い掛ける。

「うるさい、うるさい！ 私は何も悪い事してないわよ！」

「じゃあ何か？ シルヴィアが部屋に居なければ良かったのか？」

「そつそつよ。そつすれば……」

「そうすれば？」

「あたしもその続き聞きたいねえ。そうすれば何？」

二人の問い掛けにセニアは見る見るうちに頬を朱色に染めていった。

余程恥かしい事なのだろうか？

「3人共いい加減にしないと講義始まつてるよ？ それからセニア様、貴方もいい加減その物言いをお辞めになつてください。貴方に合わせる私達の事も考えて頂けませんか？」

煉耶達の話にナガトは釘をさすように割り込んだ。

「……ごめんなさい」

ナガトの言葉に返す言葉もないのかセニアは俯き言う。

そのセニアの反応に言い過ぎとナガトを責めるようにエミリアは見る。

「言いすぎだなナガト。お前こそ人付き合いを学ぶべきだ」

煉耶つまらなそうに言うど闘技場に入っていた。

それに続きナガトもまた闘技場に入っていた。

煉耶の言葉を気にしているのか、その表情は少し苦かった。

「ほら、セニアあんたも気にしないで行くよ？」

エミリアは特に気にしてないと言いたいのか俯いているセニアに笑みを向ける。

「……うん、本当ごめん」

セニアはそれだけ言つとエミリアと共に先に入つた二人を追つた。

＊

闘技場内に入ると既に以前会つたレティシアが金髪の青年と手合わせをしていた。

その回りには講義を受けに来ている学園生達が二人の手合わせを見学している。

どうやら、講義は始まつていると見て間違いはなさそうだ。

「なあ、ナガト。この講義は教官と手合わせするだけなのか？」

後ろに居るナガトに振り返り煉耶は問い掛ける。

「そうだね、教官から一本奪えれば講義を免除してくれるらしいけど」

「へえ、要は模擬戦ということか？」

「そうなるね、手合わせをして生徒の技量を確かめて適切なアドバイスをするらしいよ」

「受けた事ないのか？」

「僕は、出が葉隠れだからこの手の講義は受けてないよ」

「なるほどな、相応の腕があれば受ける理由もないよな」

「そうでもないよ、フリーターランクの評価試験の一つだからね」

煉耶達に追いついて来たエミリアがそう言った。

隣にはしよげ返っているセニアが居る。

「二人は講義を受けているのか？」

「腕を磨くには丁度良いからね。セニアは陛下に受けるように言われているらしいよ？」

と、エミリアはセニアに話を振る。

「え？ うん。あたし魔導師だから接近戦だけはてを抜くなっ

て、お母様が……」

エミリアはナガトの言葉を気にしているのか控えるように答えた。

「とすると、手合わせをしている奴は知り合いか？」

煉耶は手合わせをしている金髪の青年に目を向け問い掛けた。

「え？ ……ええ、一応知り合いよ」

セニアはレティシア達を見てばつ悪そうに答える。

「セニアの恋人候補だよ」

エミリアがレティシアの言葉を楽しげに笑みを浮かべ補足した。

「へえ、そうなのか……腕の方は素人っぽいな」

「誰が恋人候補なのよ！ あんなへなちよこが恋人なんてありえないわ！」

セニアは頬を朱に染めエミリアに捲し立てる。

勘違いするなと言いたいのだろう。

だがしかし、それが肯定しているようなものと本人は気づいていないようだ。

煉耶はセニアの言葉を話半分で聞きつつレティシア達の試合に意識を傾けていた。

（……教練してるつもりなのか？）

試合の運びはレティシアが守勢に徹し青年がひたすら攻勢に回っている。

そんな状態である。見方を変えれば一方的に青年が攻めているように見えるが、煉耶の瞳にはそうは映らなかった。

（考えなしに剣を振り回しているようにしか見えんな……自来也、どう見る？）

（下地が足らん、模擬戦をするレベルじゃねえの）

話題を振られた容赦なくそう述べた。

（この講義は戦術の基本は教えんのだろうか？）

（そいつはわからねえの。只、レティシアは講釈たれるタイプじゃねえのは、確かだの）

「なあ、ナガト。これ以外に技能講習はあるのか？」

「いや、なかったはずだけど、どうしたの？」

「そうか。彼が不憫だな」

「不憫？」

どういう意味かと、ナガトは問い返すが煉耶はそれ以上語ろうとはしなかった。

否、答えられなかったと言うべきだろう。

二人の試合が終わり青年の剣が弾かれ、次はお前だと告げるように煉耶の目の前に突き刺さったのだ。

飛んでいった剣を追うように学園生達もまた煉耶と目の前に突き刺さった剣を見ている。

剣を弾き飛ばされた青年は悔しいのか苦悶の表情を浮かべている。学園生達の注目を浴びながら、煉耶は地面に突き刺さった青年の剣を抜き歩み寄った。

「良い試合でしたね」

煉耶は悔しそうにしている青年に笑みを浮かべ剣を差し出した。

「——えっ？ ああ、悪い」

青年は思いもよらない咄嗟の出来事に苦悶の表情を引込み照れるように剣を受け取った。

「少しだけだが腕を上げたな、レオン」

「あつ有り難う御座います！ 先生」

誉められた事が嬉しいのか、レオンは照れるように言った。

「折角だ、生徒達の後学のためにも貴方の腕を見せてくれないか？」

…鞍佐波煉耶殿？」

レティシアがそう言うと、学園生達にどよめきが走った。

「私が鞍佐波煉耶？ 冗談は止めて下さいレティシア教官」

煉耶は苦し紛れに肩をすくませレティシアの言葉を否定し立ち去ろうとした。

が、後ろから斬り付けられたような錯覚を感じる程の殺気に足を止めざる終えなかった。

「失望したよ。英剣は育て方を間違えたようだな」

煉耶の咄嗟の行動に腹を拗えかねたのかレティシアは告げるように言った。

まるで、貴様を殺すと宣言するように……

レティシアの明らかな異変に学園生達は逃げるように見物席に退避していった。

蹲っていたレオンも何時の間にかセニア達と一緒に見物席の方に退避していた。

(……やっぱり逃げられないよな)

苦し紛れの遁走が逆効果を生み出し煉耶は心中でばやいた。

玄竜騎士 その4（後書き）

年末までにもう1話更新できるよう頑張ります。

玄竜騎士 その5（前書き）

年末最後の更新？ になります。

玄竜騎士 その5

アークティカ皇城、皇国評議会室。

アークティカは女王を元首とした立憲君主制であり、それを支える各都市、同盟領大和等女王によって統治を委任された代表者、女王の側近達を中心とした議会が存在する。

国の基本方針、各都市、同盟領からの陳情、その他重要な事案等はこの議会で審議され女王の決断によって公布される。

現在、この議会では過日鞍佐波煉耶が解決したナージャ大森林でおこった荒神事件の事後処理について審議されていた。

実に数年ぶりとなる議会の出席にレーベンは大倒れさげに女王側の議席に座っていた。

アークティカの軍事総てを預かる立場にあるレーベンは本来ならば議会に必ず出席にしなければならない立場だ。

それにも関わらず彼が欠席していたのは同じく女王の側近である玄竜騎士レティシアが彼と同等の権限を保有しており、彼自身議会に嫌気が差し総て玄竜騎士レティシアに丸投げしたためである。

（議会は久しぶりじゃが、面子は前と変わっておらんあ）

レーベンは議員の顔ぶれを見回し議会に耳を傾ける。

「過日解決されたナージャ村の荒神事件についてですが、騎士団より住民の疎開要請が議会に提出されております。従いまして、これより疎開予定地の検討をおこないます」

議長が席を立ち議案を読み上げる。

「お待ちください議長。ナージャ村より騎士団派遣の要請がきていたはずです。そちらの議論が先では？」

代表者側の議員の一人が手を上げ、席を立ち議長に問い掛ける。

「その件については既に騎士団が棄却しています」

議長はレーベンを横目で一度見て答える。

どうやら、レーベンに解答を期待しているようだ。

レーベンが議長の意図を理解しつつ女王を横目で見た。
すると、女王はレーベンの視線に気づいたのかレーベンに笑みを向けた。

その笑みは貴方に任せますと言っているようにレーベンには見え
た。

(……仕方ないのう)

レーベンは心中でばやき一息置いて口を開いた。

「ナージャ村を含む北部地域は戦時危険地域になっておる。件の精
霊が居なくなった以上疎開してもらうのが一番の安全策だ。それに
今の騎士団に派遣するだけの戦力はない」

「これは、総軍団長の発言とは思えない御言葉ですね。騎士団とは
国のため、ひいては皇国に住まう民のためにあるのでは？」

議員は意地悪い笑みを浮かべ言う。その言葉に呼応するように代
表者側から野次が飛び交う。その光景にレーベンは深い溜息をつき
言葉を紡いだ。

「確かに我々騎士団は、皇国のため、皇国国民のためにある。じゃ
がな、皇国国民の我俣を引き受けるためにあるのではない！」

レーベンは机を叩き壊し言葉を続ける。

「一番安全な方法があつてそれを拒否するのは、我俣と言わないで
なんという！ 騎士団に所属する騎士もこの国の民なのだぞ！ そ
の民を、くだらない我俣で無駄に血を流させるのか！！」

レーベンは烈火の如く怒り怒号を響かせる。

レーベンの怒号で議会は一瞬で静まり、発言していた議員も圧倒
されたじろいでいた。

「な、ならば、騎士団の代わりに我が領の自警団を派遣するのはど
うでしょう？」

が、尚食い下がるように議員は言う。

「貴様もわからん男だな……アリシア」

レーベンはそう言って隣に座るアリシアを見る。

「はい、閣下」

アリシアは一度頷き立ち上がった。どうやら、何かを暴露するようだ。

「——お待ちを、此処はエドワール卿が言うように彼が治める南部領から自警団を派遣し、同時に疎開要望者を募りましょう。その上で残る者が居ればその者達をエドワール卿に一任するというのはどうでしょう、議長？」

「わかりました。では、内務総官の案を採用します。エドワール卿よろしいか？」

そう言つて議長はエドワールを見る。

「……わかりました。内務総官の案を支持します」

「他に異議がある方は挙手をお願いします」

議長はそう言つて議会を見回す。

「……ないようですね、では内務総官案を議決します。陛下如何でしょうか？」

議長はそう言つてエルテミシアを見た。

エルテミシアは議長の問い掛けに頷き返した。

「ナージャ村の議案は内務総官案をもつて可決されました。これにて当議会を終会します」

議長はそう言つて手元にある木槌で机を一度叩いた。

それを合図として議員達は流れるように議会から退場していく。

レーベン溜息を吐いてその光景を見ていた。

（……此処に居る連中は本当に国のこと、民のことを考えておるのじゃろうか？）

陛下に選ばれたとはいえ、その選ばれたゆえの優越感に浸っているだけではないのか？

そう思わずにはられない。

「ご苦勞様でしたレーベン」

議会が終わり勞うようにエルテミシアは言う。

「陛下……内務総官、何故奴を放置する？」

レーベンは一度エルテミシアを見て傍に控えている内務総官を睨

み言葉を続ける。

「奴は謀反を企てておるのだぞ！ 貴様も耳にしておるだろ」

「確かに謀反を企て、政治が何たるかを弁えておらぬ排除すべき輩ですが、陛下の代でそれをおこなうわけには参りません」

「何故だ？」

「アルセニア様の肥しにするためです」

「……成る程、セニア様に政を勉強させるわけじゃな？」

「御意。そのために濁っている者をあえて残しているのです」

「——エル、了承済みなのか？」

レーベンを確認するようにエルテミシアを見て言う。

「ええ、でなければ肅清しています」

エルテミシアは笑みをもってレーベンの問いに答えた。

「そうか、ワシが心配するまでもないわけか」

エルテミシアの答えにレーベンは何処か取り残された気分になった。

（時間は流れておるといふこと、か）

「じゃがナージャ村の件はどうする？ 残った者を見殺しにするわけにはいかんじゃら」

その虚しさを打ち消すようにレーベンは言葉を続ける。

「無論折をみて鞍佐波殿クラスのフリーターを送ります」

「……エドワールが何かしでかすのを待つわけか。じゃがそう上手くいくかのう」

「帝国を戦争状態となった場合も踏まえたうえです」

内務総官はそう言ってレーベンを見る。

この辺で引き下がって貰えないだろうか？ と、問い掛けるように。

「わかった。ならば情報部に逐次監視させよう」

「御意。感謝致します」

内務総官はそう言って頭を下げた。

「閣下、奥方様がお見えです」

レーベンの隣にいたアリシアがそう言って議会の入り口に顔を向けた。

それに気づいたのか奥方はこちらに一度礼をした。

その手にはバスケットが握られている。

「ああ、もう昼か」

レーベンはバスケットの意図を理解し外に目を向ける。

外は食事をするには良い晴れ具合だ。

「——ところで、レティシア殿は如何なされたのですか？」

内務総官は探るようにレーベンを見て問い掛ける。

「……あの脳筋娘なら、今頃不幸続きの坊主とやりあっておるんじゃないか？」

レーベンは思い出したくない事を思い出したような顔つきで内務総官の問いに答えた。

そのレーベンの言葉にエルテミシアは困ったものだと言いたげに苦笑した。

玄竜騎士 その6（修）（前書き）

長らくお待たせしました。諸事情により更新出来ない状態になって
いましたが、地味に再会していきます。

3 / 2 1 加筆修正

玄竜騎士 その6（修）

「なあ、あの人本物の鞍佐波煉耶なのか？」

見物席へ逃げてきたレオンは傍に居るセニア達に問い掛ける。

「本物よ——って、何で貴方が此処に居るのよ？」

セニアは嫌そうに問い返す。

「別にいんじゃない、仲間なんだし」

「あんたの仲間になった覚えはないんですけど？」

セニアはレオンに明らかな不快を見せ言う。

「落ち着きなよセニア。そんなにっんけんとすると彼氏が愛想つかすよ？」

そんなセニアを茶化すようにエミリアが二人の間に割り込んだ。

「なっ——」

エミリアの言葉にセニアは一瞬にして頬を赤く染め上げ絶句する。

「ところでレオン、あんたの剣、我流なの？」

「えっ？ ああ、そうだけど？」

「ふーん、剣を学ぶ気があるなら爺ちゃんに頼んであげようか？」

「……どういう意味だ？」

「あんた、今のままじゃ強くなれないよ」

「何でだよ？」

「基礎が全然足りてないからだよ、あんた。未熟なあたしが言うのもなんだけど、物事は順を追って学んでいった方が良いよ？」

「んなこと言われたってよ……」

どうすればよいのだと、そう言いたげにアークは顔を歪める。

「ま、学ぶ、学ばないはあんたの自由だけどさ、教えを乞う事は恥かしい事じゃないよ」

エミリアはそう言って闘技場内に居る二人に目を向ける。

「あそこに居る鞍佐波も、誰かから学んでるんだよ」

「……」

その言葉にアークは黙したまま、闘技場内の二人に目をむけた。

＊

先に仕掛けたのはレティシアだった。

手にしている剣を、背を向けている煉耶に無造作に振りおろす。振り下ろされた剣は空を切る音と共に煉耶に向って突き進んでいく。

煉耶は咄嗟に半身を翻しギリギリのところで剣先をかわした。

（鞭……いや、接続剣か！）

——はずだった。

避けたはずの剣は、まるで意思を持っているように屈折し再び煉耶を襲う！

煉耶は咄嗟に誓眼を抜き、襲ってくる剣を弾く……が、そこで奇妙な違和感を覚えた。

（反応が遅れている……？）

自分の意思よりも遅れて体が動いている……これが眼鏡の効果なのだろうか？

（——神威）

煉耶は咄嗟に剣とレティシアから距離をとった。

煉耶が距離をとったことにより、剣は追尾を断念し縮小していった。

（マスター、メガネをお外しにならないのですか？）

明らかに不利な状況に心配そうにシルヴィアは問い掛ける。

（……）

シルヴィアの問いに煉耶は沈黙するしかなかった。

本来なら全力で戦わなければいけない相手だ。

シルヴィアが心配するのは尤もだろう。

しかし、眼鏡を外すという事はこの闘技場に居る総ての人間の未来を見る事他ならない。

煉耶にはその決断が出来なかった。

「それがお前の実力か？」

レティシアは何かを迷っている煉耶を見下し、問う。

「……そうだと言ったら？」

「そうか……残念だ。一つ良い事を教えてやろう、英剣に剣を教えたのは、この私だ」

それが合図だった。

レティシアはどこか哀愁を漂わせ、剣を大きく振り、上げた。

その瞬間、剣の刀身が消えレティシアの背から無数の刃が螺旋状に放たれた！

放たれた刃は煉耶を貫くべく襲い掛かる！

（神——いかん！）

煉耶は咄嗟に回避しようと行動に出る。

が、それよりも早く……いや、煉耶が自分の反応のずれに足をとられ、回避不能な距離まで刀身が迫っていた。

（——クソッ！）

煉耶はダメージを覚悟で誓眼を構える。

回避がダメなら、可能な限り刀身を弾いて防御する。それしかなかった。

が、それでも致命傷は免れないだろう。

（——来る！）

煉耶が身構えた瞬間、無数の刀身は煉耶の目の前に展開された謎の魔法方陣に阻まれた。

展開された方陣は刃を総て弾くと爆散して砂煙を巻き上げる。

（今のはシルヴィアか？）

巻き上げた砂煙によって、僅かながらの時間を得た煉耶はシルヴィアに問う。

（はい……マスター、眼鏡をお外しになってください）

（……俺には他人の未来を見る勇気が無い）

（私が、私がマスターの目になります。ですから、眼鏡を外してください）

（意味がわからん。説明してくれ）

——私を信じてください。マスター、

（……わかった）

何処か決意じみた念を感じ取った煉耶は眼鏡を外し、懐にしまう。
（マスター、私と重なるイメージを持つてください）

シルヴィアと重なるイメージを……

意識の中でシルヴィアと重なった瞬間

——精霊憑依、

と、意識の何処かでそう聞こえた。

（目をおあけになってください）

シルヴィアの言葉に従い眼を開ける。と煉耶の体は青白い光に包まれていた。

（シルヴィア、これは一体？）

（話は後です。マナを吸い上げてください。マスター）

煉耶の反応をよそに、シルヴィアの意識は戦闘に向いていた。

（そうだな……有難う、シルヴィア）

その言葉に一瞬、隣でシルヴィアが微笑んだように感じた。

煉耶は改めてレイラインからマナを吸い上げる。

鎧の臨界を一気に超え、有り余ったマナは衝撃波を呼び覆っていた砂煙を吹き飛ばす。

「どうやら、やる気になったようだな？」

悠然と構え、レティシアは現れた煉耶に問い掛ける……不敵な笑みを浮かべて。

*

（——創剣）

煉耶は黙したまま刀を横にして柄を長くするかのように手をずらした。

すると、柄の先端からさらに青白いマナが形成されていき、刀は薙刀へと変質した。

変質した刀を軽く振り、煉耶は構えた——不動明王のように。

（未来は、見えてないな）

煉耶は確認するようにレティシアを見た。

シルヴィアが未来視を封じてくれているのだろうか？

いや、そんな事は今はどうでも良い。

シルヴィアが信じると言ったのだ。

シルヴィアを信じて、目の前に居る鼻息の荒い龍を叩きのめす。

只それだけだ。

「——それは確か神風流、不動の構えだったか？ 英剣の猿真似程度では私には勝てんぞ？」

「……」

「だんまりか……よかろう。だが、精霊と同調したくらいで私に勝てると思うな！」

煉耶の沈黙が再戦の合図となり、レティシアの咆哮に似た怒轟が場内響き渡った。

レティシアは構えを解き剣を大きく振り上げ煉耶に振り下ろした。

レティシアの背から再び夥しい量の刃が展開され一斉に煉耶を襲う！

（——陽炎）

レティシアの攻撃に対し、煉耶の反応は早かった。

煉耶を中心に水平に煉耶の残像が展開する。

展開された数体の残像は迫りくる刃をことごとく弾き、中心に居る煉耶自身もまた薙刀を回転させ襲いくる総ての刃を弾き飛ばす。

（——閃槍）

煉耶は回転させていた薙刀の余波をつかい、攻撃に転じる。

煉耶は回転させていた薙刀を止め、まるで投擲するような形でレティシアに振り向ける。

振り向けた薙刀から光の奔流が生まれレティシアを襲う！

光の奔流はレティシアに直撃するような形で炸裂し土煙を巻き上げる。

（……）

煉耶は薙刀を構え直し巻き上がる土煙を見据える。

と、そこで煉耶の瞳に奇妙な光景が写った。

土煙の横からレティシアの残像が突出し、煉耶にめがけて突撃してきた。

咄嗟に煉耶は身構えるが、その残像は煉耶の目の前ですうっと消えた。

（今のは一体？）

考える間も無く状況は一変する。

先程の残像と同じ動きでレティシアが煉耶に突撃してきたのだ。それに応じるように煉耶もまたレティシアに突撃する。

両者が交差する瞬間、レティシアが煉耶を斬り伏せるために降ろした剣を煉耶は弾き飛ばすように薙刀を振り上げ、薙刀ごと連接剣を弾き飛ばした。

「なっ!？」

レティシアの驚愕に僅かな隙が生まれる。

それを見逃す煉耶ではなかった。

（――二刃返し）

煉耶はすかさず空いた片手で剣を作り出しレティシアを斬り上げる。

が、その剣はレティシアに届かなかった。

咄嗟にレティシアが斬り上げようとしていた腕を掴んだのだ。

「惜しかったな」

シタリ顔でレティシアは言う。

勝負は決まったかに見えた。

（――臍）

「――何!？」

目の前に居た煉耶が突如霧散する。

「……まだ続けるか？」

レティシアが探すよりも早く煉耶はレティシアの後方に現れ静かに告げた。

レティシアの背中には青白い剣が突きつけられている。

「――参った。完敗だ」

勝負はレティシアの敗北で幕を閉じた。

*

「終わったわね……って、レオンは？」

二人の仕合が終わり問い掛けるようにエミリアを見るが、近くにいたはずのアークが居なくなっている。何時の間に消えただろうか？
「あんたの目の前を走ってるけど？」

エミリアはそう言って視線でレオンを指す。

視線の先には二人に向って場内を走っているレオンが居た。

「何時の間に……まあ、良いわ。それにしても凄い試合だったわね」

セニアはエミリアと同じく場内に視線を向け言う。

「うん、凄かった」

「……参考になった？」

「次元が違いすぎて参考になんないよ。でも、ま、良い刺激にはなつたかな」

「良い刺激、ねえ——あ、ところでナガトはどうしたのかしら？」

セニアは思いだしたようにエミリアに問い掛ける。

「さあ？ 仕事じゃないの？ 黎香居るっぽいし」

エミリアはそう言って対岸の見物席に視線を向ける。

セニアもまたエミリアに言われ視線を向ける。

確かに対岸には銀髪の女性のようなシルエットが見える。

「黎香の護衛か、ナガトも大変ね。ねえ、次の講義どうする？」

「どうするって、受けるに決まってるじゃん」

「違うわよ。煉耶よ。連れて行ったほうが良いのかしら？」

「別に、もう良いんじゃない？ おば様の約束は果たしたんでしょ？」

「うん、そうだけど……」

「だったら、あまり干渉するのもどうかと思うよ」

「そうかしら？」

と、セニアはエミリアを見る。

「そんなもんだよ。あんまり干渉すると、嫌われるかもよ？」

「なんでよ？」

意味がわからない。と、セニアは苦笑する。

「あたしと似た性格っぽいから」

「意味がわからないわよ」

「あたしと似て、他人にはお節介焼くくせに、自分は焼かれるのが嫌いっていうね」

エミリアはそう言って肩をすくめた。

*

仕合が終わり、煉耶は誓眼を鞘に収め再び眼鏡を掛けた。

それを合図としたのか纏っていたオーラが急速に収束していく。

「何故、初めから全力で戦わなかった？」

レティシアは煉耶に振り向き、見て、問う。

「……正直、シルヴィアが背中を押してくれなかったら、あんたに殺される事になったとしても全力で戦わなかっただろうな」

「——違うな、私が聞きたいのはそんな言葉じゃない」

「じゃあ何て言えば——って、おい——」

煉耶の言葉を突如遮り、レティシアは煉耶の胸ぐらを掴み胸元に引き寄せ、続ける。

「精霊のせいにするな、お前は自分で決断して、私と全力で戦った。自分の決断を信じる」

「じゃあ、何か？ あんたを舐めていたとも言えばよかったのか？」

「その通りだ。そうすれば、私は調子に乗るなど、ヤキをいれるだけで済んだ」

レティシアは煉耶を突き放し、言う。

「……嫌な展開だな」

煉耶はそう言って苦笑する。

「お前に一つだけ足りないものがある」

「……責任か？」

「違う。自分に対する自信だ」

「そうかもしれないな、俺は自分に自信をもつような事をした事が

無いからな」

煉耶はそう言っただけをすくめる。

「自分の意思、選択に、自信を持って」

「そう言われてもな」

「とりあえず、胸を張ることから始めてみる。上手くない事があってもお前の精霊達が何とかしてくれる。だから――」

「――だから、自分の選択に勇気を持って、」

レティシアは射抜くように煉耶を見て言った。

「……」

煉耶はその言葉に何もいえなかった。

「ま、年寄くさい説教はこの辺にしておこう。お前に憧れる奴が居るようだしな」

レティシアはそう言っただけで視線を煉耶からずらした。

視線の先にはレオンがこちらに駆け寄って来ていた。

(……自信、か)

煉耶は突きつけられた欠点に自問していた。

何をすれば持てるものなのだろうかと……

*

「煉耶、ライセンス証を貸してくれないか？」

唐突にレティシアは煉耶に問い掛ける。

「……？ 何をするつもりだ？」

煉耶は、レティシアに問い返ししながらライセンス証を渡す。

「別に燃やしたりするわけじゃない。只、サインするだけだ」

そう言っただけで、レティシアはライセンス証を見て何かを書き込んだ。

「これでお前は正式にAクラスフリーターだ。おめでとう」

そう言っただけでレティシアは改めてライセンス証を差し出した。

「……そうか、ありがとう」

煉耶はライセンス証を受け取ろうと手を出した。

「Aクラスってやっぱあんた凄いな」

が、それにレオンが割って入るように現れた。

煉耶は手を止めその声に振り返る。

「ああ、さっきの…… よければ名前を聞かせてくれないか？」

「悪い、レオン・アークライト、セニア達にはレオンって呼ばれてる」

「そうか。俺の名は鞍佐波煉耶だ。好きに呼んでくれ」

「まったく、レオン、お前はいつも間が悪いな」

二人のやりとりをつまらなそうにレティシアは見て言う。

その片手には差し出したライセンス証がまだ握られている。

「ああ、すまない」

煉耶は振り返り受け取っていなかったライセンス証を受け取る。

「あ、すみません」

レオンはばつ悪そうに頭を掻き言う。

「まあ、今に始まった事ではないか。では、私は行く。煉耶、何か困った事があれば私かミレニアに相談しろ。大抵の事は解決してやれる。それとレオン、他の講義をサボるなよ。ではな」

レティシアはそう言うのと踵を返し闘技場から立ち去っていった。

「……講義は終わったのか？」

レティシアの後姿を見ながら煉耶はレオンに問う。

「ああ、さっきの試合が終わったからじゃないか？」

「随分アバウトだな」

「まあ、教官だからな。他の講義はちゃんとしてるよ」

「そうか」

（シルヴィア、さっきの現象はなんだったんだ？）

煉耶は思案する素振りを見せシルヴィアに問い掛ける。

（マスターの才能に方向性を加えさせて頂きました）

（どういう事だ？）

（マスターの未来視を予知という形にしたのです）

（勘みたいなものか？）

（はい。付け加えるならばマスターが見る事象は結果です）

（なるほど、可能性を集約させた状態か）

（はい）

（そうか、ところでもう一つ聞きたいんだが、自来也は何処へやった？）

（あ、邪魔でしたので出て行って頂きました。今戻しますね）

（ったく、いきなり巻物の方に飛ばしやがって……）

（お、戻ってきたみたいだな）

（おう、飼い主に似て荒っぽいことをしやがるからの。レティシアを負かしたようだな）

（まあな）

「なあ、この後どうするんだ？」

考え込んでいるように見える煉耶を心配するようにレオンが問い掛ける。

「——え？ ああ、すまん。少しガイウスに用事があってな、悪いが講義の方は……」

と、煉耶は取り繕うようにレオンに言う。

「——工房に行くなら、俺も付いて行って良いか？」

が、間が悪くレオンは目を輝かせ煉耶に言う。

「ああ、別に構わないが」

（迂闊だったな）

煉耶は苦笑を浮かべレオンと共に闘技場を後にした。

玄竜騎士 その6（修）（後書き）

ちよこつとお知らせというか、前作ですが、諸事情により4／10
辺りを持って一旦削除します。

嘗て伝説と謳われた男 その1

ガイウスの工房へ行く道すがら二人は精霊の庭へ来ていた。

（しかし、まいったな）

隣を歩いているレオンを横目で見て思う。

ガイウスに用事がなかった訳ではないが、朝の件も含め一人になりたかった煉耶にとって、この状況は悪すぎる。

前例を鑑みるに、このままだと新たな厄介事に巻き込まれる可能性が高いのは下手な勘繰りとは言えないだろう。

（どうしたものかな……）

と、思案していると隣にいるレオンが突然顔を顰めた。

何事かと、レオンの視線の先に目をむける。と、その先には老夫婦が精霊の庭の泉の傍でピクニックシートを広げ昼食をとっているのが見えた。

時刻は既に昼下がりが、快晴。外で食事するには良い天気だ。

「……あの夫妻がどうかしたのか？」

何故顔を顰める？ と、煉耶はレオンに問う。

「いや、だつてよ……」

幾つだよ。と、言いたげにレオンは口籠もる。

「成る程、こちらの世界ではピクニックには年齢制限がつくのか。良い事を知ったよ」

「いや、そうじゃねえけど……つておい！」

レオンの言葉を半ば無視するように煉耶は老夫婦に歩み寄っていた。

「こんにちは。良い御天気ですね」

「ピクニック気分を満喫するには絶好の日和じゃよ。お前さん方は学生か？」

煉耶の言葉に騎士風の老人はサンドウィッチを頬張り答える。
その隣に寄り添うように座る老婦人は何も言わず笑みをむける。

（騎士団の人間か？）

「私はしがないフリーターですよ。学生は彼ですね」
慌ててやってきたレオンを指して煉耶は答える。

「ど、どうも……」

老夫婦を知っているのかレオンは声をどもらせ挨拶する。

「ふむ。ところで、レティシアとやりあったのか？ 煉坊」

老人は残りのサンドウィッチを頬張り煉耶に問い掛けた。

「……ご老体、貴方は何者ですか？」

明らかに自分を知っている問い掛けに煉耶は身構える。

「アークティカ皇国軍総軍団長、クリサリス・シュトレーベン……
アークティカの生きる伝説の一人だよ」

煉耶の問い掛けに答える形でレオンが言う。

どうやらレオンは初めから老夫婦の事を知っていたようだ。

「……顔を顰めていたのはそれが理由か？」

「まあ、そうだけど」

「——はて？ ワシらはお主に顔を顰められるような事をしたかの
う……」

レーベンを身を乗り出しそう言ってマジマジとレオンを見る。

「……お主、エドガーの倅か？」

「……そうっす」

「ふむ。やはりな、エドガーに良く似ておる。どれ、此処で会った
のも何かの縁じゃろうし、少し話してもしていかんか？」

レーベンはそう言って二人に座るよう促した。

*

「ところで主ら、昼はもう済ませたか？」

「いえ、まだですが？」

「俺もまだです」

「ならば、此処で食べてゆけ。量は沢山あるからな」

レーベンはそう言って老婦人に目配せした。

老婦人はレーベンの目配せに頷き脇に置いていたバスケットを開

く。

「ワシの嫁、ミリアリアじゃ」

「よろしくね。二人とも」

ミリアリアは二人の前に握り飯とサンドウィッチが入ったランチボックスを展開した。

二人は「頂きます」と、言っ**て**ボックスに手を伸ばした。

煉耶は握り飯をレオンはサンドウィッチをそれぞれ手にとった。

「ミリア、茶をくれ」

クリサリスはそう言っ**て**ミリアを見る。

「はい、どうぞ」

ミリアリアはバスケットからポットを取り出し御茶を入れクリサリスに渡した。

「——美味しい！」

「口に合っ**た**ようじゃのう」

レーベン**は**レオンの反応に御茶を啜り、笑みを浮かべ満足げに言う。

「……煉坊、どうした？」

レオンを後目にレーベンは、握り飯を一口食べたまま硬直している煉耶が気になり問うた。

「——っ！？ いえ、懐かしい味がしたものでつい」

と、煉耶はそう言っ**て**握り飯を頬張り、二個目に手を出す。

「そうか……時にレオン、お主剣の腕の方はどうなんじゃ？」

「——どうっ**て**、どういう意味ですか？」

レオンは一瞬ビク**つ**と反応する。が、気取られないようにサンドウィッチを飲み込み問い返した。

「鈍い奴じゃのう。腕は上が**っ**ておるのかと聞いておるんじゃよ」

「……ボチボチです」

レオンはどこか負い目を感じているのか、そう呟くと新しく手にとったサンドウィッチをほうばった。

「ボチボチ……か」

レーベンがレオンの反応に困ったように御茶を啜る。

「素人と変わらないって堂々といえば良いだろう。くだらないプライドで曖昧に誤魔化そうとするなよ。クリサリス殿が困っているだろ」

二人のやりとりに助け舟を出すように煉耶は言う。

「ちよっお前！」

思わず掴みかかりそうな勢いで煉耶を見てレオンは声を荒げる。

が、凶星なのかそれ以上言葉が続かなかった。

「素人？ なんじゃ、エドガーから剣を学んでおらんのか？」

レオンの反応を後目に気にせず、意外だったのか目をぱちくりさせレーベンはレオンに問う。

「……はい」

「そうか、エドガーは家族思いじゃからのう。お主の将来を心配して伝えなかったのか」

レオンの沈んだ姿にレーベンはどこか哀愁を漂わせ呟く。

「何か慣習でもあるんですか？」

二人のやりとりを見て不思議に思い煉耶はレーベンに問い掛ける。

「煉坊よ、ワシらが戦をしているのは知っておろう？」

「はい」

「この国では代々、騎士の家に生まれた者は剣を、魔導士の家に生まれた者は魔法を、自分の子供に伝えてゆく慣習があるんじゃないよ。

悲しい事じゃが、戦が長引いているせいで何時の間にか出来てしまった慣習でな……いつか戦場に立つ日のために、とな」

「……なるほど。でも、それとレオンが剣術を学ばせてもらえなかった事とは無関係ではありませんか？」

煉耶は俯いているレオンを横目で見てレーベンに問う。

「……ふむ。お前さんはエドガーが無責任じゃと言いたいのか？」

「違いますよ。それを言ってしまったら、私は批難出来る立場じゃありません。只、子供の将来を案じて何も教えないというのは、果たして正しいのだろうかと思っただけです」

「……難しい問題じゃのう」

「私見ですが、……恐らく、エドガー殿は将来レオンが戦場に立つて自分より先に死なれるかもしれないという、息子の最悪の将来を案じたのではないのではないでしょうか？　だから、その未来の可能性を可能な限り潰せるように自分から何かを教える事を放棄した。でも、それでは、子供の選択肢、レオンの選択肢を無用に広げて、狭めるようなものだと思います」

「身を護る術は教えて然るべきじゃと？」

「そうですね。私も似たような環境で育ちましたから……おかげで祖父に何度も殺されそうになりました。おまけに本来築かれるはずだった自信や誇りという奴がまるで無くて、回りの人間にはそれがあるという事に愕然として、劣等感だけが無用に育ってしまいました。たよ。私のような若輩者が言うのもおこがましいのですが、少なくとも教えるという行為を放棄する事は間違っていると思います」

「厳しいことを言うのう」

「すみません」

「いや、良いんじゃないよ。言ってくれんと分からんからのう……」

レーベンが茶を飲み干し何か思案するように顎に手をあてる。

（じゃが、ワシがエドガーに言うのはちと、筋違いじゃしなあ……
ならば――）

「――レオンよ。ワシから武術を学ぶ気はないか？」

結論に至ったのかレーベンは改めて俯いているレオンを見た。

「――えっ？」

唐突な問いにレオンは呆気にとられレーベンを見る。

「ワシからエドガーに言うの簡単じゃが、筋違いじゃからのう。ならば、部下の責任は上司の責任という事で、どうじゃろう？」

「いや、でも……」

「良いじゃないか、学ぶのに遅いも早いもないだろ」

唐突の申し出に尻込みするレオンを後押しするように煉耶は言う。
「そりゃそうだけど……本当に宜しいんですか？」

レオンは改めて何うようにレーベンを見る。

「勿論じゃ。ワシに二言はない」

レーベンはレオンの不安を払拭するように言った。

「じゃあ……その、よろしく願います」

レオンはそう言つてとレーベンに頭を下げた。

「うむ。ならば、早速やるとするか」

レーベンはそう言つと徐に立ち上がった。

「えっ！？　今からですか？」

「無論じゃ、お主の実力を見ておきたいからのう。さあ、行くぞ！」

レーベンはそう言つとレオンの腕を掴み引きずるようにその場から離れていった。

「ちよつ、ちよつと待つてくださいよ！　せめて立ち上がらせてくださいって！」

レオンの悲鳴に似た訴えが虚しく木霊した。

嘗て伝説と謳われた男 その1（後書き）

ちよつと遅れて申し訳ないです。前作については告知したとおり削除させて頂きました。御了承ください。

嘗て伝説と謳われた男 その2

「お茶は如何かしら？」

レオン達に視線を向けている煉耶にミリアリアは唐突に問い掛ける。

「——あつ、頂きます」

向けたられた笑みに思わず煉耶は反射的に頷く。

「はい、どうぞ」

ミリアリアはバスケットからカップを取り出してお茶を注ぎ煉耶に差し出す。

煉耶は受け取るとそのままお茶を啜った。

「御味の方はどう？」

「とても美味しいです。それに懐かしい味がします」

そう言つて煉耶はお茶を啜り握り飯を頬張る。

「お母さんの味？」

「いえ、母の味は食べ慣れていきますから……どちらかと言うと父の味、ですかね」

煉耶はお茶を啜り、躊躇うように一息おき、ポツリと呟いた。

「貴方のお父様はあまり料理をされる方ではなかったのかしら？」

「ええ。昔、私がまだ幼かった頃、一度だけ作ってくれた事がありましたね。それつきりですが……」

煉耶はそう言つて軽く微笑する。何処か懐かしむように。

「父親想いなね」

「……どちらかと言うと、後悔、ですかね。父とはその後仲違いしてしまひまして、挙句、よりを戻す前に死なれてしまひました」

「そう……」

ミリアリアはそう頷くと煉耶の言葉を待った。

「父に死なれた時、思いましたよ。当たり前だと思っていた日常は、案外、あっさりと崩れ去るんだって、こんな事なら仲直りしておけ

ばよかった。てね……」

言い終えると、煉耶は残っていた握り飯を頬張りお茶を飲み干した。

「……そう」

哀しみに浸るわけではなく何処か寂しそうにしている煉耶に、ミリアリアは言葉を掛けようとはしなかった。

（慰めの言葉なんて、不要よね）

「……有難うね。貴方のお陰で少しだけ、未来が変わったわ」
ミリアリアはそう思うと話題を変えるように言葉を紡いだ。

「——何のことでしょうか？」

唐突にそう言われ、煉耶は驚いたようにミリアリアを見た。

「貴方がレオン君の背中を押してくれたお陰よ」

そう言ってミリアリアは離れている二人へ目を向けた。

その視線の先には珍しくレーベンがレオンに熱を振るっている姿があった。

「——えっ？ どういう意味ですか？」

煉耶は困ったように呟きミリアリアを見る。

「そうよねえ、少し昔話になるけど良いかしら？」

ミリアリアはレーベン達に視線を向けたまま煉耶に問い掛ける。

「はい」

「何時くらいからかしら、あの人が老いることを、生きる事を止めてしまったのは……」

煉耶の言葉を待つて、ミリアリアは徐に語り始めた。

「……」

「アークティカがまだ小さな国だった頃、世界に名を轟かせる二人の騎士が居たわ。一人は、魔剣ストームプリンガーと共に語られる騎士レイル・ゼオノス。もう一人は世界で唯一、人の身で魔神を屈服させた騎士、クリサリス・シュトレーベン。この二人のお陰でアークティカは小国にも関らず、他国に攻め入られるような事はなかった」

「しかし、滅んでしまった……」

「そう。あの人が生きる事をやめてしまった、アークティカが滅んでしまった理由、それはとても些細な事だった。当時、世界は神魔戦争の煽りで神族狩りが横行していたわ。そんな中でアークティカは唯一、神族を庇護する国だった。それ故に世界各国、魔神達にとつて滅ぼすべき敵である神族を庇うアークティカは、世界の敵以外の何者でもなかった。でも、二人の強力な騎士と逃げ延びた神族を擁しているお陰で、簡単には滅ぼせない状況に陥っていた……今でも覚えているわ。あの人の隣で共に戦ったあの日を……」

（——隣で共に戦った？）

その言葉に煉耶は気妙な違和感を感じた。

共に戦ったのならば、わざわざ隣という言葉をつけ加える必要はない。

にも関わらず、それを付け加えている。ならば、その言葉の指す意味は一体？

（……）

煉耶は言葉の真意を量りかねられず、疑念を抱いたままミリアリアの言葉を待った。

「……アークティカの崩壊は実に呆気なかったわ。アークティカに住まう一部の諸侯が身の保身に走り、結果アークティカの強固な防衛網は内側から崩壊していった。あの人と私はアークティカの民と庇護していた神族を逃すために、押し寄せる世界各国の軍と魔神を相手に懸命に戦ったわ。でも、アークティカは瞬く間に塗り潰されていった。あの人と私は生き残った民と神族と共に安住の地を求め世界を彷徨う事になった——いつかアークティカを取り戻すために……」

ミリアリアはそこで一度間をおき、改めて煉耶を見て言葉を紡ぐ。「だけど、アークティカの崩壊は一人の男の手引きによるものだった。彼の目的はアークティカの民や神族達を護る事ではなく、国内の情勢と世界の情勢で板挟みになっている皇女を救う事だった。

彼の手引きは実に的確だったわ。でも、的確すぎたのね……彼はアーケティカを滅ぼす事は出来たけど、肝心の皇女を救う事は出来なかった。彼は一番救わなければならなかった人を救えず、自分の不甲斐なさに絶望して剣を捨て、騎士を辞めてしまった。それを聞いたあの人は激昂したわ。その怒りがアーケティカをとり戻す起爆剤になったのだけれど……怒り過ぎたんでしょね。あの人はアーケティカを取り戻す過程でみるみる燃えて、取り戻した後は灰しか残らなかったわ。挙句、無二の親友だった彼を許さないだけならまだしも、彼の事を未だに疑っているわ……あの人の時間はアーケティカを取り戻したと同時に止まったのよ。私の時間と一緒にね」

「彼というのは、もしかして？」

「そう。貴方が信頼しようとしている希望の管理者、レイル・ゼオノスよ」

「……」

その言葉に煉耶は顔を顰めた……信じられない、と。

その表情にミリアリアは薄く微笑むだけだった。

「でも、それも今日で変わるかもしれないわ。貴方のお陰でね」

ミリアリアは話題を戻し笑みを浮かべ煉耶に言う。

その言葉には確かな暖かさがあった。

「……貴方は一体？」

「私の名は、グランスパイク。世界で唯一アーケティカに味方した物好きな魔神よ。貴方のお陰で未来が少しだけ変わる可能性が生まれたわ。本当に有難う」

ミリアリアはそう言うのと煉耶の手を両手で手に取った。

「俺は、何もしてませんよ」

「いいえ、貴方は今さっき、あの人と私、レオン君の未来を変えて見せたのよ。煉耶君、貴方には力がある。他人を幸へ導く力が……だから、自信をもって頂戴」

「……やっぱり、わかるもんなんですかね？」

煉耶はポツリと呟く。

心中で隠していても、見えてしまうものなのかと、それとも、普段の仕草に出てしまっているのだろうか？

「違うわ。私が魔神だからよ。精霊とか魔神という種族は人と違って、人の魂、心の色が見えるのよ……貴方の心は貴方が感じている以上に傷だらけなのよ。だから余計に心配してしまうのかしらね」

「……」

「ごめんなさい。いきなりこんな事を言われても答えようがないわよね。そんなに気にしなくても良いわ。きっと良い方向に向って行くわ」

「——さっきのようにですか？」

煉耶は冗談交じりに笑みを浮かべた。

「……そうね」

ミリアリアは笑みを浮かべ頷くと煉耶から手を離れた。

「楽しそうじゃのう、二人とも」

嘗て伝説と謳われた男 その2（後書き）

中々更新速度が上がらない…… orz

嘗て伝説と謳われた男 その3

レオンの教練を終えたのか、戻ってきたレーベンは二人にそう語りかけ腰をおろす。

「レオンはどうしたんですか？」

「ん？ ああ。ガイウスとここに先に行くと言っておったぞ？」

「そうですか」

嫌な予感がする。自分を置いて先に行ったという事は、元からガイウスに用事があったということだろう。だが、自分と一緒に行くこととしたのには理由があるはずだ。

（……嫌な予感がする）

早々にこの場を切り上げ二人のもとに向おう。煉耶はそう思い立ち上がるうとした。

「——行くのか？」

「ええ。ちよつと嫌な予感がするもので」

「……ふむ。もう少しばかりゆくりして行かんか？ ワシもお主と少し話をしておきたい」

レーベンはそう言うのと懷からパイプを取り出し火を付けた。

「それにな、今行くとお主もとばつちりを受ける事になるぞ？」

レーベンはニヤリと笑いパイプをふかせた。

「まあ、それはありえそうですね」

煉耶はレーベンの言葉に苦笑して座りなおす。

「クリサリス殿はレオンの用事に心当たりがあるのですか？」

「レーベンと呼んでくれて構わん。まあ、お主も大よそ見当がついておるじゃろう？」

「ええ、まあ……」

「ひとついえる事はな、あいつは相応の実力がある人間にしか腕を振るわん」

「……なるほど」

レーベンの言葉を聞いて煉耶は、何故か自然を溜息が出ていた。
(あいつの事だからガイウスを怒らせてるんだろっなあ……)

そう思うと、何故か自然と苦笑いが出た。

「それで、お話というのは？」

煉耶は気もちを切り替え改めてレーベンに問い掛ける。

「何、年寄りの小言程度の気持ちで聞いてくれ。畏まる程の事でもないからのう」

そう言っただけでレーベンはパイプをふかせる。

「これから話すことは、寧ろ、お前さんに対する謝罪に近い」
「……」

煉耶はレーベンに静かに言葉を待った。

「——すまん。ワシらの遺恨を押し付けてしまって、本来ならワシらが片付けねばならぬ事だ。ワシらの世代は皆、今は亡き英剣も悔やんでおる。が、ワシらの世代では世界の流れを変える事ができなかった……拳句、後進の育成も中途半端な形で成ってしまった。お前達の代には、特に煉耶、お主には本当に苦勞をかける。すまない」と、レーベンは伏目がちに頭を下げる。

「……私が神風流を継ぐとき、英剣は何故か私に斬られたがっていました。その意味が今わかった気がします」

その姿に煉耶はポツリと呟く。

「……そうか、あいつも悔いておったか。煉耶よ、レイルからお前さんの役目は聞いて御るか？」

レーベンはパイプを吹かせ問い掛ける。まるで、溜息をつくように。

「ええ。座を取り戻す事だと」

「そうか。ならば、教えておく事がある。座が減びているかどうかは管理者にしか分からぬ事だ。現状、この世界の状況がわかる奴は二人しかおらん。一人はレイル、もう一人は帝国にいる」

「管理者はレイルさん一人では？」

「違う。帝国にいる管理者が暴走した結果、此度の事態が起こった

んじゃよ」

「成る程。でも、何故？」

知っているのかと。と、煉耶は問い掛ける。

「何故、ワシがこんな事を知っておるか、か？ それは、奴と同じ時間を生きておるからな。帝国の管理者については、ミリアから聞いた。恐らく、レイル以外には誰も知らんはずだ」

誰かを思い出したのか、忌々しげにレーベンに煉耶に告げる。

「……それを俺に教える理由はなんですか？」

「ワシはな、レイルを信じる事を辞めた。あいつを信頼したお陰で酷い目にあつた。それだけならまだしも、あいつは心のどこかで世界に住まう者達に絶望しておる。じゃから、あいつを簡単に信用してはならん」

「レーベンさんの言いたい事は分かります。ですが、今の俺の立場だとレイルさんを信じるしかありません。例え、疑わしい疑惑があったとしてもです」

「じゃから、折をみてワシが今言ったことを突き付けて見ると良い。あやつの本音が聞けるかもしれん。その上で再度、考えて見てくれぬか？」

「……わかりました」

「お主の後ろ盾はレイルだけではない。ワシも、エルテミシアも、ギラムジも、皆お主の後ろ盾となってくれる。心配するな」

「そうだと、良いんですね」

煉耶は溜息をつくように言う。政治や情勢が変われば手の平を返すのだろうと。

「……ふむ。話は変わるが、今国内で革命派の動きが活発になっておる」

「……」

「恐らく……いや、間違いなくお主の命を狙っておるだろう」

「そうですか。それで、俺にどうしろと？」

動き出す前に消してしまえとでも言いたいのだろうか？

煉耶は真意を計るように問う。

「革命派の先鋒は、恐らく、大和葉隠れ衆の長の息子だろう。細かい話はナガトか静音に聞いてみると良い」

「俺は、甘い汁に釣られる人間ではありませんよ？」

信用はそう簡単には生まれない。と、言いたげに煉耶は問う。

「分かっておるよ。ワシが言いたいのには気をつけておけと言っ事じや。革命派のしかも忍び衆の連中は、人目をいとわん。恐らくは、機会をうかがっておる」

「わかりました。といっても、どう気をつければ良いか分かりません」

煉耶はそう苦笑すると、徐に立ち上がった。

「行くのか？」

「ええ。そろそろ行かないと、レオンが可哀想な目に会いそうですからね」

「もう、可哀想目にあっておると思うぞ？」

レーベンはその言って笑みを浮かべた。何処か嬉しそうに。

「まあ、物事は程々が丁度いい。が、俺のモットーですから」

煉耶もまた笑みを浮かべそう返すと、ガイウスの工房へ足を向けた。

*

「今日は、良い日よりでしたね」

煉耶が去った後、ミリアリアは唐突にレーベンに問い掛けた。

「そうじゃのう。リアのお陰じゃよ」

「私は何もしてないわよ？」

ミリアリアは笑みを浮かべ言う。何の事かと。

「……そう言うことにしておくかのう」

分かりきったとぼけぶりに、レーベンは笑みを浮かべ言う。

「ねえ、貴方」

「ん？ なんじゃ？」

ミリアリアの言葉にレーベンは振り向き問い掛ける。

「長生きも悪くないと思うわよ?」

「——そうかもしれないのう」

ミリアリアの言葉にレーベンはしんみりと何処か寂しそうに答えた。

レーベン達との会談を終え、煉耶はガイウスの工房がある森の中に居た。

先に行ったレオンはまだ工房に居るだろうか？

レーベンはああ言っていたが、個人的には既に事は済んでいて、レオンは工房に居ない状況が望ましい。が、実際そんなことは無いだろう。

剣を作ってくれと言って、それにガイウスがぶちきれているそんな姿が容易に想像できる。

（凄いい剣を手に入れたからといって、強くなれるわけじゃないんだけどな……）

物事は積み重ねである。

レオンはまずそれを理解するべきだ。

（レーベンはたぶんそれを教えてくれるだろう）

「——もう一度言ってみろ！ このクソ餓鬼があ——！」

そんな事を考えていると森の奥からガイウスの怒号が響いてきた。（やっぱりか……）

響いてきた怒号に煉耶は溜息を吐き、ガイウスの工房へと足を向けた。

*

「だから、煉耶が強いのは、その、あんたの剣のおかげじゃないのか？」

レオンの言葉に思わずガイウスは胸倉を掴もうとする。

「……お前、俺の剣を持っただけで強くなれると思ってるのか？」
「が、何を思ったのか掴もうとしていた腕を止め、大きく溜息は吐いた。」

「そんなことは無いけど、そのお陰もあるのかなって……」

「そうか。なら、俺から言えることは——」

「どうしたんだ？」

ガイウスの言葉を遮り煉耶が森の中から現れた。

煉耶を見るとガイウスは毒気を抜かれたように強ばらせていた顔を崩した。

「煉耶、お前からこの馬鹿に言ってやってくれ」

「何を？」

内容がわからず煉耶は怪訝にガイウスに問い返す。

「お前が強いのは、俺の剣をお陰だとぼざいてな……」

「ん……確かにそうかもしれないな」

ガイウスの言葉に何か思案するように肩をすくませ煉耶は答える。それを聞いてガイウスは肩透しを食らったように目を丸くする。予想外の言葉に驚いているのだろう。

それとは対照的にレオンは目を輝かせガイウスを見る。

「……仮にそうだったとしても、お前に造ってやる剣なんぞ——ん？」

何とか持ち直したガイウスは冷や水を浴びせるようにレオンに言おうとする。

が、工房の奥から漂う僅かな気配が気になり言葉を止めた。

「……気が変わった。材料を用意するなら造ってやる」

ガイウスは暫く工房を見据え、言葉を変えた。

まるで、何かに気付いたように……

「本当か！？」

「ああ、俺は嘘は言わん。協会に依頼を出すから受け取って来い」

「わかった！」

レオンはそう頷くと脱兎の如く工房から去っていった。

ガイウスの予想外の了承が余程嬉しかったのだろう。

その姿を見終えるとガイウスは懷から徐に携帯電話らしき端末を取り出した。

「——！？ちょっとまってくれ。それは……もしや、電……いや、通信機か？」

「ああ、そうだ。携帯コミュニケーションターというんだが、これがどうかしたのか？ お前の世界にもあっただろう？」

「ああ、勿論あるが……」

思わない文明の利器の登場に煉耶は驚きが隠せなかった。

街並みからして、文明レベルは前の世界で言うところの中世辺りだと思っていたが……

（携帯があるなら、技術レベルは前の世界とそう変わらないのか？ もしくは、それ以上？ いや、たとえ他にも反映されているはず

……技術が極端に集約されているのか？）

「なあ、煉耶。レオンのお守りを頼めるか？」

ガイウスは視線を端末に向けたまま問う。

「内容によるが？」

煉耶はガイウスが持っている端末を注視したまま問い返す。

「あいつじゃ、材料を取って帰って来れないんだ」

「……なら、採りに行かせる理由はなんだ？」

「あいつに惚れた女神が居たみたいでな。ひよっとすれば新しい神格者が生まれるかもしれない」

「——神格者？」

「神族達と契約して、絶大な力を授かり永遠の時を生きる者。それが、神格者だ」

「成程、あいつがそれになれる可能性があるわけか……だったら、なおの事一人で行かせるべきじゃないのか？」

「場所が場所なんでな。あいつじゃ生きて帰って来れない以前に、ミレニアにぶちのめされて説教されるのがオチだろうな」

操作を終えたのか、ガイウスは指を止め端末を懐に戻して言う

「……何処に行くんだ？」

「ここから南に広がるサラエナ山脈。火龍族、南の竜族の聖地の一つに数えられる場所だ」

「俺でも生きて帰って来れる保証がないと思うぞ？ つーより、絶対に行きたくない」

少し前に本物のドラゴンと交戦した煉耶にとって、その場所がどれだけ危険なのか想像は容易である。龍族の聖地と言うからには恐らく、こちらで言う飛竜ワイバーンや翼竜リンドウルクム、果ては翼帝竜ティアマットのような竜が跋扈し聖地に侵入する者を頑なに拒んでいるはずだ。

仮にその地に赴いた場合、火炎のプレス程度では済むはずが無く、火球と雷を纏った嵐に見舞われる事になるだろう。そんなことになればレオンは間違いなく死ぬだろうし煉耶自身も無事に済む筈がない。

「まあ、聞け。その聖地を治めている龍族の長。まあ、ミレニアの親父なんだが、そいつの鱗を貰ってきて欲しいわけだ。お前が同行していれば分けてくれるはずだ」

簡単な仕事だろう？ と、言いたげに笑みを浮かべガイウスは言う。

「断固断る。他をあたってくれ」

依頼が依頼だけにガイウスの笑みが邪悪に見えるのは気のせい
か？

「お前の気持ちはわかるが、お前が考えているような事は起こらない……はずだ」

「今の間は何だ！ それに今のレオンに本当に必要なのか？」

「ま、先行投資みたいなものだな。報酬は弾むから、頼む」

「……今行く必要があるのか？」

「——ああ。でなければお前に頼まない」

ガイウスはそう言うのと工房へ戻り一振りの刀を持ってきた。

煉耶が預けた、天地刀、空、だ。

「一応改造は終ったんでな。持っていつてくれ」

ガイウスはそう言うって煉耶に空を渡す。

「どんな改造を施したんだ？」

受け取った煉耶はそう言うって空を背に背負う。

「抜刀する時に横からでも鞘が開くようにした。後、蛍光石のお陰で刀身を任意で消せるように出来ている」

「どういう意味だ？」

「使ってみりゃわかる。剣にマナを籠めると刀身が現れるようにしてあるから、マナを籠める時は慎重にな」

「分かった。有難う」

「レオンの事、頼んだぞ」

「そっちは、頼まれたくないんだが……」

ガイウスの言葉に煉耶は苦笑みを浮かべる。

一息置いて、煉耶は空を抜いた。

「……成る程、柄しかないのか」

「そうだ。その状態でマナを籠めると、透過した刀身が現れる。間違っても人に向けるなよ。何かの拍子で刀身が発現したら酷い事になる」

「気をつけておくよ」

「ついでに言っちゃおうとだな、まだそいつの強化は終わってないんだ」

「……そこから先を当ててやろうか？ 実は手持ちの材料が切れちゃってな。その材料もサラエナ山脈で取れるんだ。どうだ？ 行く気になっただろ？」

ガイウスを真似るように溜息混じりに煉耶は言う。

「その通りだ。頼んだぞ」

その声真似の背中を押すようにガイウスは同意する。

「……何でこんな仕事しか回ってこないんだろっな」

ガイウスを駄目押しに、煉耶は溜息を吐き渋々と了承した。

竜の鱗と卵 その1（後書き）

更新が遅く申し訳ないです。

実のところこのまま続けてもいいのかなど、思ったりします。

竜の鱗と卵 その2 (前書き)

更新が遅くなって申し訳ないです・・・orz

竜の鱗と卵 その2

ガイウスと別れ、煉耶は協会に向かっていた。

今頃、狂喜乱舞していたレオンがミレニアに腰を砕かれている頃だろう。

レオンの事だしつくく食い下がっている事は間違いない。

それを俺が引き受けて、レオンを連れて行かなければならない。

レオンが余計な事をしなければ事は簡単に済む……はずだ。

（二人とも、サラエナ山脈について知っているか？）

煉耶は森を歩く最中二人の居候に問う。

（ガイウスが行っていた通りだ。道は知っておるから案内は任せておけ）

居候の一人である自来也が先に答えた。

（私は行った事はありませんね。どのような場所なんですか？ 自来也さん）

もう一人の居候であるシルヴィアが自来也に問う。

どうやら、サラエナ山脈に興味があるようだ。

（俺も知りたいな、山脈というからには火山だったりするのか？）

（そうさの、ワシも入り口までしか行けなんだから、詳しくは知らんが、長がある火口付近は、マグマの大河が流れておるらしい。恐らく、シルヴィアのおった森と同じでマナが豊富なんじゃろう。山脈自体は、火山といえる場所は火龍族の長が鎮座しておる付近くらいだの）

自来也は揚々と二人に話す。

（すると、あれか、天下の自来也も竜族には勝てなかったという事か）

（流石のワシでも、数には勝てん）

（自来也さんが突破できなかったという事は、相手のドラゴンさん達はとても好戦で、聖域に近づくものは何者も許さないという

事なんでしょうか？)

(少なくとも、協会でくだを巻いているドラゴンの許可はいるじゃろうな)

(許可があっても、襲われる可能性が高いということか。前回もそうだったが、今回はさらに楽しい旅が待っているようだな)

煉耶はそこで大きく溜息をついた。

前途多難の上、苦勞が目に見えているのに嫌気が差しているのだろう。

(マスターがお望みでしたら、私がドラゴンの対処をしましょうか？)

(シルヴィアが対応しちまったら、北と南の精霊達の間で全面戦争が勃発しないかの？)

(――俺が思うに、今回の依頼は多分、いや間違いなく、ドラゴン不殺になるだろうな)

(……ミレニアか)

自来也は何処か疲れたように呟く。ミレニアが無茶な要求をする様を想像できているのだろう。

(まあ、シルヴィアの気持ちだけ受け取っておくよ)

(わかりました。ですが、マスターに危険が及ぶようでしたら……)(大丈夫、何とかするさ)

煉耶は肩を竦め苦笑する。

シルヴィアの厚意は嬉しいが、精霊同士の戦争が勃発するのは勘弁して欲しい。

(ともかく、まずは協会で起こっているであろう事態の收拾だな)
宿主の言葉に二人は苦笑を持って同意した。

*

フリーター協会本部。

昼過ぎという事もあいまって、多くの人間が出入りをしている。何時もどおりの風景ではあるものの、今日は一部違っていた。

所内入って目の前にあるカウンター傍で、いや、カウンターで若

い青年が対面越しの女性に食い下がっている。恐らくは、依頼の事なのだろう。がしかし、女性は青年を追い払うように怒鳴り散らしている。その喧騒は外に響くほどだ。

普段にはない。珍しい光景、いや、どうやら、そうでもないようだ。

所内に居る人間の殆どは気にもせず、寧ろ楽しむように眺めている。「ガイウスに頼まれたんだよ。何で受けさせてくれないんだよ!」青年は何処か縋るように見るが、女性はしかめっ面のまま溜息をつく。

「あのねレオン。いくらガイウスに頼まれようが、許可できないものはできないわよ。大体、貴方、ランク幾つよ?」

当たり前前の事言わないでよ。と、対面の女性、ミレニアは肩を竦める。

「Dランク、だけど……」

「そうね。Dランクよね。このガイウスの依頼、・・・Sランクなのよ。あたしが言っている意味わかる? K? n n e n 私が S i e 言っている事を v e r s t e h e n 理解 w a s 出来ますか? i c h s a g e ?」

と、呆れ気味に溜息をつく。

「わかってるよ。わかってるけど……」

人の神経を逆撫でするような言い方しなくてもいいだろ。

この依頼はまたとないチャンスなんだ。

俺を見下す連中を見返す……だから!

「けど、何よ? 自分はDランクだけど、私を倒して暫定Aランクを獲得するくらいじゃない。とても言うわけ?」

「……ガイウスがその依頼をこなせば、俺専用の剣を作ってくれるって言っただよ。だから——」

失敗してもいい。死んでもいい。だから、俺にチャンスくれ。頼む!

「……貴方の気持ちは理解してあげたいけど、ダメなものはダメよ。

火龍族の長はね。そんな簡単に会ってくれるほど柔軟な相手じゃないわ。貴方じゃ、山脈の竜達に食われてしまうのがオチよ」

レオンの心情を理解しているのか、していないのか。けんもほろろに

彼女は願いを打ち砕く。

「やってみなけりゃわかんねんだろ！ やってもいないことを勝手に決めるなよ！」

「だったら、今すぐ私を倒してみなさい。そうすれば認めてあげるわよ。言つとくけど、手加減はしない。かかってくるなら、殺される覚悟くらいしなさい」

「——っ！？ ……わかった」

感情が高ぶりすぎて押さえが利かなくなりつつあるのか、自分でも気付かないうちに彼は背中の大剣に手をやっていた。

「騒がしいな。外まで聞こえてるぞ」

と、唐突に入り口から声が聞こえた。

後ろから水を差され、感情が高ぶったまま彼は声がした入り口の方へ振り向く。

「……煉耶」

「そんなに荒れて、どうした？」

雰囲気を感じたのか、所内に入ってきていた煉耶は陽気に声をかけ、特に気にする事無く傍へ近づき、肩を組んだ。

やっていた手を振り解かせるためだろう。

「後は任せろ」

と、彼は耳元で囁いた。

えっ？　なんで？　俺は分けがわからず彼を見つめ返した。

突然の事に気付けば、大剣から手を離していた。

「ガイウスから頼まれごとをされたんだが、依頼は来ているか？」

なんでも、火龍族の聖地に行くらしいんだが？」

彼はわざとらしく咳払いして問う。

俺は二人のやりとりを見守る事にした。

「ええ、きているわよ。 レンレンが受けるなら依頼は受理するけど、貴方にだったら龍族の長も会うでしょうからね」

「……あーうつうん。 レオンも同行させるようにと言われているんだが、良いか？」

「良いけど、結構危険な場所よ？」

「ああ、ドラゴンに襲われるんだろ？ 襲われたら三枚くらいにおろしてやればいいさ」

なっ、と、同意しろと言っているのか笑みを浮かべ俺の肩を叩く。咄嗟の事に驚き、ミレニアを見てつい口走ってしまった。

「そっそうさ。 ワイバーンだろうが、リンドブルムだろうが、ティアマットだろうが三枚におろせばなんて事——」

俺が口に出たのはそこまでだった。

気付いた時には、彼女の拳がレオンの顔面にめり込んでいた。

「調子に……乗る・な！」

「ふあい」

「……大丈夫か？」

彼女の渾身の一撃をうけ倒れるレオンに驚き、彼は声をかける。

「大丈夫よ。 いつもの事だから、それより、今回の依頼、前金ないけど大丈夫？」

「俺は、多分大丈夫だが、レオンお前はどうか？」

「おっ俺は、たっ多分、大丈夫じゃない」

ミレニアの拳が余程堪えたのか、レオンは痛む顔面をさすり、立ちあがる。

「わかった。 なら旅支度は俺に任せておけ。 お前はお前でしなきゃならん手続きをやれ」

「あっありがとう」

「例は無事に帰って来れてから言ってくれ」

「そっそうかもしれないけど。 今言っておきたかったんだ」

顔面は痛い、辛うじてハニカんだ笑みを向けた。

俺のチャンスを繋げてくれた煉耶に。

「まあ、いいさ。じゃあ、準備が出来次第協会を通して連絡する」
「わかった。本当、ありがとう」

俺は流行る胸を抑え、これからの事を考えていた。
(サラエナ山脈に行く事になるから、一ヶ月くらいの遠征になる。
そうすると、短期休学届けが必要だな。親父達にも言わないと……)
やる事は一杯ある。そう考えると、何時の間にか走り出して協会
を後にしていた。

只一ついえることは、俺の中煉耶への感謝で胸が一杯だった。

「……厳禁だな」

「ま、ああいう子だから。でも、茶番よね」

「——やっぱりか、あいつの護衛に俺が含まれていたんだな？」

レオンを見送ると振り向いて俺は彼女に問うた。

「そうよ。面白いから最後まで付き合っただけだね」

「だろうな。ま、正直、レオンを殺されなくて良かった」

「あー……さっきの事？ ごめんね。ちよつと頭に血が昇ってたわ」

「——なあ、出来ればと言うより、これは俺の要望なんだが……」

「なにかしら？」

「あいつの事を丁寧に扱ってやってくれないか？」

彼は昔の自分を重ねるのかしんみりと彼女を見る。

その瞳には何処か悲しみが滲んでいる。

「あの子にはあのくらいが丁度良いと思ってるんだけど？」

「そうかもしれないが、もう少し優しくしてやってくれ。そうしな
いとあいつは折れちまう。大事なのは折るんじゃなく、育む事、じ
やないか？」

「わかったわ。貴方がそう言うなら、育ててみましようかね」

俺の意図を理解したのか、彼女そう微笑んだ。

「ありがとう」

「たいした事じゃないわよ。それよりもお金の本当に大丈夫？」

「困ったら相談に来るさ」

「オッケー、出来る範囲で相談にのるわ」

彼女は親指を突き出して笑みを浮かべた。

それを受け取ると彼は帰ろうと彼女に背を向けた。

「――あ、相談事で思い出したが、レオンの事で何か苦情があったらレーベンに言った方が良いかもしれないな」

が、少し歩いて思い出したのか、立ち止り彼女に振りむいた。

「なんであの小父爺様が出てくるのよ？」

「そりゃ、レオンの師匠だからさ」

帰り際、彼はそう言った。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その1（前書き）

体調が絶不調ですが、更新します。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その1

孤児院に着いた頃には日が傾き夕刻になりつつあった。

中では静音が子供達と一緒に夕飯の準備を始めている。

帰ってきたばかりだったが、当然俺もその和に加わり、夕飯の準備を手伝っていた。

夕飯の準備が整った頃、見計らったタイミングでナガトがリビングに顔を出した。

皆がそろったところで、そのまま夕飯となった。

献立は、パンとシチューに食卓の中央に、わけて食べられるようなコロッケを盛った皿が置かれている。子供達は目の前に置かれたパンやシチューよりも我先にコロッケを取ろうと、軽い争奪戦がおこなっている。そんな光景が微笑ましく、ついつい止めるのを忘れてしまう。兄弟がいなかったせいかな、こんな光景に軽い羨望を持っているのかもしれない。

そんな騒がしい夕飯を終え、俺はリビングにそのまま残っていた。

ナガトは静音に子供達の世話を頼まれ子供達と一緒に部屋に戻っていった。

静音はキッチンに立ち食器を洗っている。

俺は、食器の片づけを手伝うついでに静音に話があることを伝えた。

「出かけるのか？」

片づけを終えた彼女は、食卓の適当な席につき問う。

「ああ、サラエナ山脈に行く事になってな。暫くこっちを空けることになりそうだ」

俺は静音に御茶を煎れ差し出し対面側に座った。

「有難う。サラエナ山脈か……龍の聖地に行くのか？」

と、彼女は御茶を啜る。

「察しが良いな」

「どんな依頼かは知らないがあそこに行くのであれば、大体想像がつく。またミレニアの無茶な依頼か？」

「今回がガイウスからの依頼だ。無茶なのは変わらないが」

俺は苦笑して静音を見る。

今日一日の出来事を彼女に語ったら、きっと俺と同じように苦笑するだろう。

「色々あったみたいね。サラエナ山脈に向うなら色々準備が必要になる。お金の方は大丈夫？」

「……今回は、前金が出ないんだ。で、相談なんだが、この前の依頼の報酬から幾らか工面できないか？」

「わかったわ」

「良いのか？」

呆気ない返事に俺はおもわず彼女に問い返してしまふ。

「ええ。元々は煉が稼いだものだ。だが、足りるかは正直微妙なところだな」

「んー可能な限り食料も持って行きたいんだがな」

俺は御茶を啜り思案する。こういった旅の場合狩猟するのも醍醐味ではあるが、食べるための下処理が面倒といえば面倒だ。

「狩猟すれば食料の方は少なくともいけるはずだが？」

思案している俺に助言するように問う。

「下処理が面倒だからやりたくないんだよ。こちらの技術は結構高いみたいだから、食料が携帯できる道具とかあると見てるんだが？」

「勿論ある。が、魔導具はそれなりの値が張る物ばかりだぞ？ セオリーで行くなら依頼をこなして貯まったお金で買い揃えていくものなんだが……」

「俺の報酬だけで揃えられるか？」

「無理だな」

「そうか……」

にべもない解答に御茶を啜るしかなかった。

それに釣られてか、彼女も御茶を啜る。

「なら、やりたくないがミレニアに借金するしかなさそうだな」

「ガイウスからふんだくる方法もあるぞ？」

彼女は冗談交じりに言う。

「それは可哀想だから止めておこう」

彼女の言葉に何故か俺は自然と笑みがこぼれた。

「あいつも苦労症だから——話はそれだけか？」

彼女の問いに俺は緩んだ頬引き締める。

彼女も本題がそれではない事を気付いていたみたいだ。

「……言いたくなかったら答えなくてもいいが、葉隠れの長の息子を知っているか？」

「無論知っている。あいつがどうかしたのか？」

「実は今日レーベン殿に会った。で、その葉隠れの長の息子が革命派に属しているらしい。おまけに近々俺の命を奪いに来るそうだ。

静音は何か知っているか？」

「なるほど、私に話すという事は、ナガトには話したくないわけだな？」

確認するように彼女は問う。

「まあな。場合によっちゃやっぱりあいつも敵になるかもしれないからな」

実際少し前まで敵だったのだ。情勢がまた違う方向へ転べば同じ状況に陥るかもしれない。出来ればそんな事にはならないで欲しいが……

「私も敵になるかもしれないぞ？」

「そうなたら、諦めて大人しくアクティカを出て行くことにするよ……敵になる、ならないが問題じゃないんだ。別に静音が言いたくないなら、ナガトに聞くだけなんだが……ナガトは友人なんだな。聞けば教えてくれるだろうが、根元を断とうと奮闘するかもしれない。そうすると、俺があまり考えたくない未来がやってくるかもしれない。それが嫌なんだよ」

「私が無茶する事は考えないのか？」

「俺は静音に無茶をして欲しくない」

「現金だな。そうやって私を縛るつもりか？」

「ああ、子供達のためだからな」

「随分と身勝手だな……まあ、良い。だが、教えられる事はあまりないぞ？」

残念なのか、寂しいのか、複雑な面持ちで彼女は言う。

「構わない」

「わかった。名はシオン・ムラサメ。大和葉隠れ衆、長の息子で葉隠れ衆最強と言われている忍びの一人だ。歳はナガトと変わらない。改革派に属しているのは父親に反発しているのか、自分の考えがあるのか、詳しくはわかっていない。が、監視はついているはずだ」

「そうか。何か解り易い特徴とかはないか？」

「額に大和と書かれた特徴的な額当てをつけているはずだ。私の知っているシオンならな」

「そうか………すまないな」

「良いさ。私は煉の味方だ。他の者が敵になっても、な。だから心配するな」

彼女は安心しろ。と、言いたいのか笑みを浮かべる。

「——有難う。ああ、それと話は変わるが、明日買い物に付き合ってくれないか？」

「わかった」

話を終えると彼女は残りの御茶を啜った。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その2（前書き）

その1に組み込もうかと思ってたものです。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その2

「子供たちは寝てしまったか？」

煉耶が自室に戻った後、私はこの場には居ない誰かに問いかけた。

その問いに答える代わりにナガトがリビングに顔を出す。

出してあった湯呑みの類は既に煉耶が部屋に戻る前に片付けてしまっている。

彼にお茶を淹れてやるべきか少し迷ったが、そんなに長く話すつもりはないだろう。

長くなるようであれば改めて淹れれば良い。

私はそう決めるとナガトの様子を伺った。

「今しがたみんな寝ちゃいましたよ」

そう答えナガトはリビングの私のそば近くの椅子に腰をかけた。

私は椅子を座りなおしナガトと向き合った。

「――聞いていたのか？」

「護衛ですから。子供達の相手は影分身ですませました」

ナガトはそう微笑む。

「そうか。気を悪くしないでやってほしい。煉耶は別にお前の事を信頼していないわけではない」

私もつられて笑みを浮かべる。どんな形であれ子供達が私以外の人間に懐いてくれることはうれしいことだ。もう少し人手があれば、煉耶の世話に回ってやれるのだが、それは我俣だろう。

「敵であった僕を簡単に信用……信頼してくれました。彼が巻き込みたくないと思っているくらいわかります。それに、僕だけじゃ、根元を断つことは無理です。仮に断つことになれば、相当の覚悟が必要になります」

事情を知っているのか、ナガトは笑みを消し視線を伏せ言う。

「大和の重鎮方の決断、か」

その様子にながトが迷っているのだと理解した。

私は追求すべきか少し迷った。里を抜けた部外者が口にすべきことではないからだ。

「……静音様だから言いますが、改革派の殆どは大和の忍び衆です。一部アークテイカの評議員達が手を引いてますが、忍び衆が瓦解すればおのずと駆逐されるでしょう。戻しますが、忍び衆の構成の殆どは甲賀衆です。一部伊賀衆が混じっていましたが、伊賀隠れ様が説得しました」

私を信頼してか、ながトはその先を口にした。

その信頼をうれしく思うが、同時に複雑な気持ちでもあった。

結果で言ってしまうえば、私が知るということは、煉耶を巻き込むことになるからだ。

もっとも、これは彼が深く関わる問題だから巻き込むは少し不適切ではある。

が、身動きが殆ど取れない私を知るということは、彼に直接動いてもらう事と同意義でもある。

その辺はやはり仕方ないのだろう。私が身動きが取れたとしても対して変わらない。

彼は自分が事件に巻き込まれるのは構わないが、親しい人間がそれに巻き込まれてしまうのが嫌なのだ。それは全部自分で解決することと同意義……いや、巻き込めるだけの信頼をおける仲間がいなだけなのかもしれない。いずれにしても今の私にできる事は少ない。もう少し、せめてあと一人この家を守る人間がいれば状況を変えられるのだが……

「そうか……甲賀の者達は皆国想いだからな。現状の大和の在り方に不満があるのだろうか」

私は素直な感想を口にした。帝国に滅ぼされてから実質国ではなくなつた元の状態に、新たな国として立て直したいと思っている人間は多いだろう。私も少し前までそう思っていたのだ。子供達の世

話を始めてからは、その気持ちは薄れてしまっているが、立て直せる機会があればやはり立て直すべきだろう。何時までも同盟国に負担をかけるわけに行かないだろう。が、復興させるにしても課題は積載している。真の意味で大和が一つにならねば国として復帰することはできないだろう。

「あるのでしょうか。そうでなければシオンが唆される事はなかった」

ナガトは溜息をつくように言う。親友であった同僚があつさりと敵に回ってしまったことに心を痛めているのかもしれない。

「あ奴も国を想う心が強いからな。ところで由良はどうしている？ 由良がこちらに来てくれると大分助かるのだが？」

「……シオンの監視についてます」
シオンは苦々しく答えた。

私は話題を変えたことを後悔した。

彼にとつて一番聞いて欲しくなかった事柄であつたのは、一目瞭然だったからだ。

「——何故行かせた？」

「由良が自分で志願したんです。僕は止められなかった」

止められなかった事を後悔している口ぶりでナガトは答える。当たり前といえば当たり前だろう。

愛している妻が進んで危険な任務に就くのだ。

私情を捨てねばならない身であっても気が気ではないはずだ。

「すまない。お主もつらいんだな……そうなんと今回はお主にはこちらに居てもらったほうが良いな」

煉耶が遠出する以上、連中が仕掛けてくる可能性が高い。

被害というより、連中の矛先を一つにするためにもこちらの防御を固めねばならない。

煉耶には悪いが、最悪の事態を回避するにはこれしかない。

今更だが、一人で世話することに固執していた自分が恨めしく思う。

「そうですね。この家を守るのも私の仕事です——でも、間違いない連中は仕掛けてきます」

「またとない機会だからな。こちらに直接仕掛けてくること可能性は低いだろうが、念のため連中の矛先を一つにしておく必要がある。煉耶には由良の件を含めてそれとなく伝えておこう」

そう言いながら私は彼にどう伝えるか、思案していた。

露骨な言い回しでは駄目だ。彼に極端な行動を取らせるわけには行かない。

明日は彼の買い物に付き合ってから伝える機会は幾らでもあるが……これを伝える事が意外と厄介ではないだろうか？

「……よろしく願います」

頭を下げるナガトを見て私の肩に事の責任が重くのしかかっているのを改めて理解した。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その3（前書き）

大盛りになってしまった・・・

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その3

静音との話を終え部屋に戻った俺は、特にやる事もなく直ぐにベツトにもぐった。

その日は、恐ろしいくらい早く寝入る事ができた。

――が、寝入って直ぐ奇妙な夢を見た。悪夢というべきか判断に困る、妙な夢だ。

何もない暗闇の空間、この場に来るのは二度目か？

と、当たりを見渡すが、この空間に呼んだ主が居ない？

――おかしい。てつきり自来也が呼び出したのかと思っていたのだが。

となると、本当にこれは夢か……いや、そうではないみたいだな。背後に気配を感じる。

振り向くと血塗れの忍び装束姿の男が立っていた。

顔は潰れてしまっているのか、ぼんやりと霞がかかっている。

男はこちらに手をさしだし、何かを訴えるようにじり寄る。

「……あんだ、誰だ？」

俺は臆することなく問う。

残念な事に、爺様が神道者だったおかけで妖しや亡霊の類には慣れてしまっている。

いや、受け入れられるようになっていくというべきか。

「――なぜ殺したあ？ ……何故、殺したあ？」

俺の言葉に端を発して男は呻きはじめる。

「……ああ。お前、この前の忍者か？」

俺は男に歩み寄り言う。

人の命を奪いにきて、何故殺したはないだろう。

情けをかけるとも言うのかというのか？ 馬鹿らしい。

にじり寄る男のつまらない呻きに、怒りのボルテージが昇っていくのを感じた。

「襲っておいて、随分都合がいいな？」

そう言って、俺は男の手を掴む。

が、手が触れた瞬間、男は霧のように霧散した。

どう言う事だ？ と、考える間もなく今度は俺の回りを囲むように男達が現れた。

いずれも先程の男と変わらない。ぼんやりと霞がかった血塗れの男達だ。

男達は先程とは違って変わり、今度は、助けてくれ、助けてくれえ。と、呻き懇願する。

……本当に、亡霊なのか？ 亡霊の類なら般若心経か祝詞でも唱えればいいのか？

どっちにしても、覚えていないぞ。

そもそもこんな事をするために俺の中に入ってきたのか？

いや、シルヴィアがいるのに入って来れるのか？

——待てよ。もしか、これは……

可能性としては十分ありえるはず、ならば——

「——おい、この手の類は俺には通用しないぞ！ 出て来い！」

俺は暗闇をまっすぐ見つめ言った。簡単なブラフだ。

これが駄目なら、大人しく目が覚めるまでこいつらの合唱を聞くしかないが…… どうやら正解のようだ。

血塗れの男達は姿を消し、目の前に全身を青白く光らせた女性の騎士が現れた。

「さすがだな。このような形で会う無礼を許して欲しい」

女性の騎士は謝罪すると頭をたれ跪いた。

この女は何について謝っているんだ？

さっきの亡霊の件か？

「我が名はアークセイヴァーが一柱、剣の魔神ヴェルナス。故あってこの場に参上させてもらった」

ヴェルナスは立ち上がり俺を見つめ言った。

「……要件は？」

俺は無然と言った。魔神と名乗られては、警戒せざる終えない。

「お前の力になりにきた。我を使つて欲しい」

「さっきの亡霊達はあんたが仕掛けたのか？」

「……っ！ そうだ。お前を試させてもらった」

ヴェルナスは何故か少し間をおいて言った。

何を言うべきか迷っているのかも知れない。

「——そうか。なら、俺を殺しに来たの間違いだろ？」

溜息混じりに吐き捨て、ヴェルナスから軽く距離をとり重心を移動させた。ヴェルナスの間が気になりはしたが、相手がそう言っている以上、無防備でいるわけには行かない。武器がないのは心もとないが、仕方ないだろう。

「誤解しないでくれ！ 我はお前の力になりに来たのだ。敵対するつもりは微塵もない！」

ヴェルナスはうるたえ必死に訴える。

自分は敵ではない、と。

が、彼女が対応を間違えてしまっているのは確かだ。

「初対面の相手を追い詰める真似をしておいて、誤解するのは当たり前だ」

俺はヴェルナスを見据え言う。

こいつが嘘をついているのか、何かを隠しているのか、いまいちわからない。

一体何をしに来たんだ？

「すまなかつた。お前の胆力を見たかつたのだ」

「だから？ 理由になるわけないだろ」

俺はそう吐き捨てる。

「——そうだな。ならば、親愛の証を立てよう」

ヴェルナスは唇をキュツとかみ締め何かを決意した瞳で俺を見る。

「……どうやって？」

俺はヴェルナスの意図を理解できずにいた。

「近々、お前と出会う機会がある。その時に——」

ヴェルナスが喋れてたのはそこまでだった。

——妾の領域を荒らす不届き者は汝かや？

二人に割り込む形で突然、何処からか声が響きわたる。

明らかな不快の意を感じられるその声は、ヴェルナスを最後まで喋らせる事なく掻き消した。

一息の間を置いて、今度は獣の耳を持った女が目の前に現れた。

狐のような艶やかな顔立ち、足元には腰から伸びているであろう無数の、少なくとも十本以上はある尻尾が頭を覗かせている。狐の化身？ 稲荷か？

「……行つたか。災難であつたな童よ」

狐の化身は笑みを浮かべ言った。

「あんた誰だ？」

俺は怪訝に言った。

今度は何だ？ 魔神の目くらましか？

「無礼であろう。汝は礼儀を弁えておらぬのか？」

とたんに笑みを崩し、拗ねた口ぶりで不快を露にする。

なんだ？ 助けてやったのだから礼が先じゃないのかとでも言うのか？

「無礼なのはあんたも同じだろう……ここは俺の頭の中だぞ？」

俺は呆れ気味に言う。おかげで毒気がすっかり抜けてしまった。

「——む？ そうであつたな。じゃが、礼ぐらいはあつても良いのではないか？」

狐の化身はせがむように言う。何故か瞳を潤ませて。

「……助かりました。有難う……ええと、空孤様？」

参りましたよ。と、困り顔で俺は言った。

涙を見せられたからではなく、狐の化身様の正体がわからなかったからだ。

尻尾から察するに数千年は生きているのは確かだろう。

「——うむ！ しかし、妾は天孤じゃ、間違えるでない」

煉耶の言葉に笑顔を見せたかと思うと拗ねるように天孤は言った。

「あんたの尻尾の数から推察したんだがな。天狐ならもつと分かり易い姿でいてくれよ」

俺は溜息混じりに言った。狐の化身の尻尾は力の大きさに表し、生きてきた長さによって本数が変わる。確か、一尾で百年だったか？

「——おお！ あい、すまぬ。移し身を造るといつもこの姿になってしまつてな」

はっはっは、と、自分の尻尾を見て笑いながら天狐は言った。

「それで、あんたは俺に何の用事があるんだ？」
俺はうんざりして問い掛けた。

「いやな、シルヴィア殿が困っていたようだな。手を貸したまでじや。さっきの魔神、ヴェルナスと言ったか？ あやつはシルヴィア殿達へのプロテクトはかけておったようじゃが、妾にまでは手が回らなかったであろうな」

「あんたは一体？」

「妾はこの土地の守護者じゃ。時に童よ。汝はあの魔神の事を知っておるか？」

「鞍佐波煉耶だ。あんたから見れば、童だろうが、出来れば名前と呼んでくれ」

「汝が名乗るのを待つておったのだ。煉耶よ。」

にんまりと笑みを浮かべ天狐は言う。

「それは、すまない。話を戻すが、どういう意味だ？」

少々礼を失していたか。俺は内心で反省しながら問い掛けた。

「うむ。今現在こちらの世界ではあの魔神は、ヴェルナスという認識をされておらん。ここが汝の世界ゆえに名乗れたのであろう。我も戻れば違う認識をもつであらうな」

「じゃあ、あいつの正体はなんだ？」

俺は迫るように言った。

もし、敵ならば冗談ではすまない。なんらかの対策を講じなければならなくなる。

「名乗ったとおりなのであろう。こちらの世界でなんと呼ばれているかは、教えぬ」

「……何故だ？」

「汝が知らなくても良い事だからじゃ。全てを知ろうとするな。全てを知っても、誰も幸は授からぬ。が、一つ言える事は、あやつの言っていた事は真実であらう」

俺の魔神への敵愾心を削るような勢いで天孤は毅然と言い放った。
「力を貸しに来た。事か？ 何故そう言えるんだ？」

何かをわかったつもりで話す天孤に俺は疑問を感じていた。

まさか、一部始終を見ていたのか？

「うむ。見ておった限りじゃが、あやつは相応の覚悟を持って汝にコンタクトをとっておる」

「相応の覚悟？」

俺の予想は当たっていた。

なら、何で退場させるような真似をしたんだ？

「あやつの力はとても脆弱であった。シルヴィア殿が本気になっておったら、滅ぼされておったであらうな。そのリスクを負って尚、汝に会いたかった。いや、会おう、会っきつかけを造りたかったと言うべきか」

シルヴィアが本気になっていたら？ シルヴィアも事の顛末を見ているのか？

シルヴィアも判断に困っていたという事か？ 後で本人に聞いてみるか。

「弱っている魔神が俺に会う理由？ 見当がつかないな……」

俺は困り顔で言った。勝手に物語を進められてもなあ。

どう動けばいいか判断に困る……そうか、シルヴィアもひょっと危害を加えないあいつにどう接するべきか困っていたということかだから、変わりに天孤殿が仲裁にはいったのか。

「魔神の類は自分の運命を見ることが出来る。あやつの正体が何者にせよ。近々会おうのやも知れぬ」

「そう、か。気には留めておこう。あいつに害はないんだな？」

「それは汝が判断すべき事、妾に判断を委ねるな」

と、したり顔で天孤は言った。そこまで甘えさせはくれないらしい。

「そりやそうだ……認識が違うというのはどう言う事だ？」

俺は苦笑してもう一つの疑問を問い掛けた。

「あやつを知っておる者は皆、違う者と見ると言う事だ」

天孤が言っているとおりなら、つまり、本人が本名で名乗っても、相手は第三者の誰かにしかみられない。ということか？ 随分と悲しい状況だな。

そうすると、相応の覚悟を持ってきたというのも頷けるな。勝手な想像だが、あのヴェルナスという魔神は大分逼迫した状況に置かれているのではなかるうか？ それが、俺にどう関わるかはわからないが、いずれ出会ったときは、弁解くらいは聞くつもりでいたほうがいいかもしれないな。

「なるほど。ところで話を初めに戻すが、あんたは俺に何か用があったのか？」

正直に言つと聞きたくなかった。ろくでもない厄介事が増えるだけなのは目に見えているからだ。

が、物事は対等であるべきだ。天孤が教えてくれた事は間違いない俺に有益なものだ。

その礼はしておきたい。

「——おお！ 忘れておった。のう煉耶よ、社を建ててくれぬかの？」

俺の言葉に目を輝かせ嬉々として天孤は言った。

忘れたままでいて欲しかったな……しかし、社と来たか。

「……こつちでも土地神を祭る風習があるのか？」

素直な疑問を口にする。こちらではあまりそういった風習はなさそうに見えるが、大和あたりにはあるのだろうか？

「うむ。そのような風習はあまりない……」

「じゃあ、なんで社が欲しいんだ？ 別にいらないだろ」

俺は肩透かしを食らった気分になった。あまりない。って即答するわりに微妙な表現だな。

広く知られていないということか？

「妾達のような人工的に造られた精霊は、より代がなければ本来の力を発揮する事ができぬ」

天孤は悔しいのか苦虫を噛み潰すような表情をする。

「造られた？」

俺は天孤の言葉に妙な違和感を感じた。

精霊は自然発生するものじゃないのか？

「そうだ。妾のような精霊は皆、不本意ながら肉体を捨てねばならぬ事情があつた」

「もしかして、俺達の戦争のせいかな？」

しかし、肉体を捨てなければいけなくなる情勢とはな。

なんらかの事情でアーケティカのような状況に陥りでもしたのだろうか？

「左様。といつても最近のものではないがな。妾達が肉体と持つておつた時代は妾のような亜人種やエルフを含んだ人間が文明を築いておつた……ある時まではの」

「ある時？」

どうやら、かなり過去の話のようだな。

天孤の年齢から推察するに、数千年前の事だろうか？

「うむ。何故かは分からぬが、ある時管理者どもは、人間と魔神と神族を除いた亜人種を絶滅させようとした。そもそも汝が関わる戦争の発端は、管理者共の下らぬ諍いから端を発しておる。妾達はその被害を受け、やむ終えず肉体を捨て精霊となったのだ。そもそもエルフが一人しかおらぬのはおかしいと思わぬか？」

「そりゃそうだが、精霊にはなろうと思つてなれるのか？」

俺はもつともな疑問を口にした。

言っている事を総合すると、神話の時代、世界の黎明期といって

もよさそうなくらい昔の話みたいだな。機会があればガイウスにも話を聞いてみるか。

「無論、成れぬ。妾達の時代では、龍族のような連中を除けば、只のマナの流れに過ぎなかった。妾達は、管理者どもに意趣返しをするべく、世界の法則ともいえるマナの流れに同化し世界の法則を奪い取ったのだ。自由には出来んがな」

「……そうか。じゃあ、社が欲しい理由は？ 力を行使したいからか？」

「……妾はの、童が遊びまわっている姿を眺めるのが好きなのじゃよ。建ててくれるのならば、汝の悩みの種をいくつか減らしてしんぜよう」

「それはうれしいが、何で俺に頼むんだ？」
断れないとわかっていても頼まれごとをされるとつい聞いてしま
う。

すっかり習慣づいてしまった。

「この屋敷の主には何度もせつついておるのじゃが、何故か聞き入れてくれぬのじゃよ」

どこか拗ねたように天孤は言った。

「……本当か？」

俺は確認するように問い返した。

彼女の言葉がどうにも？くさくさ聞こえてしまう。

「うむ。每晚枕元で建てるように囁いておる！」

自慢げに踏ん反り返り天孤は言った。

踏ん反り返る事か？ 誰が聞いても只の安眠妨害だろう。

「どんなせつつき方だ！ もっと他のやり方があるだろ！ 夢に出るとかよ！」

「あつはつはつは！ よろしく頼むぞ。さすれば屋敷は安泰になる」
そう言つと天孤は笑いながら姿を消した。

*

翌朝、目を覚ますとシルヴィアが人の姿で俺に膝枕をしていた。

「――全部見てたのか？」

どこか釈然としないまま俺はシルヴィアに問い掛けた。

「はい。おはようございます。マスター」

シルヴィアはほっとしたような柔和な笑みを浮かべ言った。

「あの魔神のこととか？」

俺は確認するために問い掛けた。

「……はい。強制的に引き剥がす事もできましたが、マスターに敵対する意思が見受けられませんでしたので、様子を伺っていました」
シルヴィアは謝罪するかのように答えた。

例え敵意がなかったとしても、主の領内に侵入を許してしまったのだ。

内心では、心穏やかではなかったのだろう。

「そう、か。なあ、どうやってあの狐を呼び込んだんだ？」

特に気にすることなく、俺はもう一つの疑問を口にした。

シルヴィアを咎める様な真似なんぞ出来るわけがない。

「私が力を貸しました。本来ならば姿を現すことも、力を使う事も出来ない存在です」

シルヴィアは気にしなくても良い。と、俺を安堵させるように答えた。

「なるほどな……社、作ってやるか」

俺は社を造って欲しい理由を理解した。静音の枕元で囁いても意味がなかったことも。

彼女達はシルヴィア達と違い、顕現することを許されていないのだ。

故に、社といった自分を宿らせるより代が必要なのだろう。

旅の準備ついでに社の材料も見しておくか。俺はそう決めるとベツトから起き上がった。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その4（前書き）

今回はちょっとすくなめです。後この節大分長くなります。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その4

リビングに顔を出すと、何故かミレニアがお茶をすすっていた。誰かに用事でもあったのだろうか？

「何であんたがここに居るんだ？」

俺は適当な椅子に掛け問い掛けた。

静音は何処だ？ 見回すとキッチンに背姿が見えた。

洗い物の最中だろうか？

「おはよーレンレン。いやー実は言い忘れた事があるのよ」

リビングに顔を出した煉耶にミレニアは笑みを浮かべ声を掛けた。煉耶が椅子に座った事を確認すると、ミレニアはカップを置き煉耶を見つめた。

「で？ 言い忘れた事ってなんだ？」

俺は平然を装い問い掛けた。

前にシルヴィア達と話していた事が脳裏によぎっていたからだ。覚悟というより、諦めに近い形で俺はミレニアの言葉を待った。

「言い忘れたというか、お願いみたいなもの？ 何だけどさ……」
何故か困り顔で歯切れ悪くミレニアは言う。

…… あっ、そういえば龍族は心が読めるんだったな。

俺の心を読んだのか？

「どうした？ 別に文句は言わないから安心しろ」

俺は溜息混じりに言った。

変なところで女っぱい仕草をするんだな……

困り顔が恥じらいに見える。俺の目は腐ってるのか？

「聖地で出会った竜を……殺さないで欲しいのよ」

「龍族は死なないんじゃないのか？」

やっぱりか、と俺は内心でそう思い問い返す。

龍族が死ぬとは思えないわけだが、何か別の理由があるのだろうか。

「私達みたいな強力な存在ならね。聖地に住んでいる子達の殆どは、ちよつとばかり私達より力が弱いのだ。だから、肉体を滅ぼされたりすると、マナに還つて数千年後に別固体として転生することになるのよ」

「……」

困り顔で話を続けるミレニアを俺は黙って見ていた。

分かりきっていることだが、殺しに来ている相手をわざわざ手加減しなければならぬ。

俺一人ならともかくレオンがいる以上、あまりリスクを負いたくはない。

とすると、事前に交渉するか、制圧するかしないとだめなのだろうな。

ミレニア言葉を待ちながら俺は如何するか思案していた。

「……やっぱり、無茶よね。ごめん、忘れて頂戴」

俺の沈黙に何を勘違いしたのかミレニアは表情を暗くして言った。自分が無茶を言っていることは理解しているらしい。

しかし、卑怯だな……そんな顔されてしまったら、文句の一つも言えなくなってしまうだろう。

「……善処する。要は殺さなきゃ良いんだな？」

俺は溜息交じりに告げた。

甘いのだろうか。が、なんともならない場合は容赦はするつもりは無い。

「——えつ、ええ！？ 本当に良いの？」

その言葉を聞くやいなやミレニアは途端に嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ああ。だが、本当に駄目な状況になったら、その時は、無理だからな」

表情を少し強張らせ俺は念を押してに言った。

「その時はやつちやつてOKよ……有難う。無茶言つてごめんなさいね」

「そう思っているなら、少しくらい俺の我侂を聞いて欲しいな」俺は茶化すようにおどけて言った。

「お安い御用よ。何をして欲しいの？」

……何故、目を輝かせる必要がある？

予想外の反応に俺は肩を竦めお茶を濁した。

しいて言えば、**悩みの種**を持ってこないでほしいというくらいか

「わかったわ。貴方の頼み事ならなんでもバッチこいよ！」

そんなに嬉しい事なのか？

「話は済んだか？ ミレニア」

静音は俺の隣に腰を下ろした。

静音が椅子に座った事を確認するとミレニアはそう答えた。

静音は俺を見て問い掛けた。

俺は静音を見返して答えた。

忘れていたようにミレニアは二人に言った。

俺は確認するようにミレニアを見て言った。

確かに頼むつもりではあったが、こうもあっさりして良いのか？
「袖の下なしていったでしょ？　って、依頼の準備よね？」

ミレニアは笑みを浮かべ返すように言った。

ミレニアからすればわかりきった事だったのかも知れない。

「勿論だ」

俺はその笑みに答え頷いた。

これで依頼関係の悩みの種は解消された。

後は、社のほうだな。

「なら、問題なしよ」

そう言って、ミレニアは立ち上がりカップを手を取った。

「すまん。助かる」

俺は軽く笑みを浮かべて言うと、ミレニアの、協会の好意に軽く頭を下げた。

「いいのよこのくらい。それじゃ、お願いね」

ミレニアはそう言うに残っていたお茶を飲み干してリビングから出て行った。

「さて、私も出かける準備をしましょうか」

ミレニアを見送ると、静音はそう言ってリビングを後にした。
部屋に戻って着替えるのだろう。

「……朝飯、残ってるかな？」

誰に言うわけでもなく、一人残った俺はポツリと呟いた。

さすがに何も食わずに出かけるのは厳しいものがある。

とりあえず、キッチンをあさって見るか。

出かける前に少し空腹を満たしておきたい。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その5（前書き）

遅くなりました。それから、この章は大分長くなります。しくじった……orz

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その5

準備を終えた煉耶達は孤児院をナガトに任せ市場にくりだしていた。市場といっても、そこかしこに露店が並んでいるわけではなく、どちらかといえば商店街に近い街並みになっている。中央に買い物客が歩く街道がのびその両サイドに様々な物を取り扱う商店が並んでいる。朝方だと言う事も相まって買い物客はまばらで散策するには丁度良い環境だ。二人はゆったりとした歩調で市場を歩いていた。その歩く姿は普段と変わらないように見えるが、煉耶の隣を歩く静音は違っていた。服装は普段と変わらない忍び装束を改造した軽い和装の装束だが、仕草に普段とは違った色っぽさが見え隠れしており、顔には薄化粧とその存在感を際立たせる口紅がぬられていた。煉耶は普段と違う静音を上げ上げと見つめていた。いや、魅了されていた。それにも言うべきだろうか。煉耶の視線は静音に釘付けになっていた。それは恋仲同士と見られても不思議ではなかった。

……結局、パンとお茶しか口に出来なかったな。まあ、皆と食事をしているわけじゃないから仕方ないか。しかし、今日の静音は確かに気合を入れているな。只の買い物のはずだが、どうしてだ？化粧をする必要など何処にもないはずだが——ああ、そうか。

「——どうした？ 私の顔に何かついてるのか？」

俺の視線に気づいた静音は笑みを浮かべ言った。

「——いいいや、なんでもない」

静音の咄嗟の問いにはつと視線を外しどもりながら俺は答えた。そう、さっきの疑問の答えが出ていたからだ。多分、俺は今軽く赤面しているだろう。何故か？俺は気づかないうちに逢引、静音をデートに誘っていたんだ。考えてみたら買い物はナガトに頼んでも良かった。それを態々静音を指名して誘った。俺の考えすぎなら良かったんだが、この状況から考えるにそれは無い——やばい、久し

ぶりにてんぱっているな、気づかなきゃ良かった……この場合何か
会話が盛り上げたりしなきゃいけないのか？ どうすりゃいいんだ？

「……やはり、似合わないか？」

何処か儚げに寂しく静音は呟いた。その表情は暗く影を落として
いるせいで窺い知る事はできないが、シヨックを受けているの確か
なようだ。

「——ちよつ、そんな事は……悪い、ちよつと混乱してた」

俺は咄嗟に否定しようとして言い直した。誤解させるような事は
言いたくなかった。

「今日の静音があまりにも魅力的だから、その理由を考えていたん
だ……笑わないで欲しいが、今さっき逢引に誘っている事の気づい
ちまっつてだな……」

俺は頭を掻き、苦笑混じりに静音を見て言った。が、なんだか俺
の独り相撲な気がしないわけでもない。ひよつとしてすごい勘違い
をしてないか？ それを答えてくれるのは隣のお方しかいないわけ
で……

「——ぷつ、ふふつ、煉の隣を歩くのだ。化粧ぐらいしておかない
とな。私はともかく煉だけは良く見られて欲しいからな」

静音はそう言って微笑み返した。

「どういう意味だ？」

俺は言葉の意味がわからず静音に問い返す。

「煉は私という最高の女をものにできる最高の男だとな」

静音はそう言つと俺の腕に絡みついた。

真正面からそんな事言われるとなんていったら言いか困るんだが、
そんな事より……

「——ちよつ、俺はこういう事に慣れてないんだよ」

「ふふつ。さて、まずは軽い食事と行こうか」

赤面して焦る煉耶を尻目に静音は極上の笑みを浮かべた。うるた
えている煉耶が可愛いのか、静音はそのまま引っ張るように走り始
めた。

★

連れて来られた店で煉耶は二度目の朝食をとっていた。洋風の喫茶店、カフェのようだが、何故かメニューに和風の定食が載っていた。煉耶は迷わずその定食を頼んだ。腹がすいていたと言うわけはなさぞうだが、やはり朝はご飯と味噌汁が良いのだろう。静音は団子とお茶の軽食セットを頼んでいた。こういった洋風のカフェで和食を頼むところを見ると二人はやはり似た者同士なのだろう。頼んでいた食事がといたところで、二人は軽く口をつけ、徐に口を開いた。

「なあ、静音」

「ところで、煉」

二人はほぼ同時に言葉を放った。間が悪いのか、タイミングがよかったのか、それとも先程の出来事を引きずっているのかわからないが二人は気恥ずかしそうに頬を朱に染めた。

「煉耶から先に言ってくれ」

静音は自分を落ち着かせるためかお茶をすすり言った。それを煉耶は定食を口にしながら聞いていた。煉耶の方の献立は白飯と漬物に味噌汁、静音のほうは団子にお茶というお互いに質素なものとなっている。

「わかった……たいした事じゃないんだが社の材料を造れる職人を知っているか？」

俺は味噌汁にすすり口が落ち着いたところで言った。社の組み立ては自分で出来るが細かい部品を造るには相応の技術がいる。本来なら大工に頼むのが筋だが、後で天孤に何を言われるかわからんかな。

「社？ 庭にでも建てるつもりか？」

静音は不思議そうにきょとんとして煉耶を見た。どうして？ と、その表情が訴えている。

「建てて欲しいって頼まれたんでな」

静音の表情に俺は苦笑混じりに答えた。そりゃあ、聞きたくなる

よな。いきなりこんな事聞かれたら俺でも何故かと聞いてしまう。

「シルヴィア殿にか？」

静音は一番該当しそうな相手の名をあげた。確かにシルヴィアは精霊だが社が必要なタイプではない。勝手に呼称するが、夢に出てきた天孤達が精霊ならシルヴィアはそいつら統括する上位の精霊、大精霊と呼称するべきだろう。まあ、シルヴィアより上位の精霊もいるらしいが、今は気にしないでおう。

「違う。というよりあいつにそんなものは必要ない。孤児院の土地神に頼まれたんだよ。祀ってほしいってな」

そう言っただけ俺は白飯と漬物を口にほうばった。嘘は言っていないが、正直土地神と呼称するべきなのは疑問だ。

「あまり大規模な物を造られても困るが、職人には心当たりがある。買い物が終わったらいつてみるか？」

静音はそう問い掛けると団子を一口食べた。不思議な事を言っている自覚はあったが、嘘を言っているわけではない事は理解してもらえたみたいだ。

「すまん、助かる。ところで道具の類は何処に買いに行くんだ？」

そう問い返して俺は味噌汁をすすった。市場の店を覗き見していたが、それらしい店を見かけなかった。取り扱っている店は限られているのか？

「ああ、信頼できる店が一件あるんでな。場所は行っただけの楽しみとしておいてくれ」

そう言っただけ静音は茶目つきたぷりに笑みを浮かべた。

「わかった。期待しておくよ」

俺は軽く笑みを浮かべ返すと残っている定食に手をつけた。そうしている間に静音も団子に口をつけていた。

「……それじゃ、静音の用件を聞こうか」

残りの定食を一気に片付け、俺はお茶をすすり問い掛けた。明るい話題だと良いんだがなあ。

「……今回の旅についてなんだが、改革派の忍びが動き始めている

のは、知っているか？」

お茶をすすり静音は煉耶の言葉に神妙な面持ちで問い返した。

「ああ。ガイエスブルグの森に行った時に襲われたからな。本格的に動き始めたのか？」

俺は即答した。気にしても仕方ないというのもあるが、相手にするだけ馬鹿らしいと思っていたからだ。ただ、人の命をとりに来るなら相応の覚悟を持って来いくらいは言いたい……殺されかけて命乞いとか、うんざりするだけだ。

「——そうだったのか。ならば今回は恐らく本腰をいれて仕掛けてくるはずだ」

俺の即答に驚いたのか、静音は一息おいて言った。

「……なあ、なんで俺は襲われるんだ？」

俺は溜息混じりに問い掛けた。静音に聞いても仕方のない事なのはわかってはいるが……というより、誰に聞いても駄目な気もするな。現状、アークテイカにとって俺は爆弾みたいなもんだろう。

「煉を狙う刺客共の後ろに評議会の人間が隠れているそうだ。恐らくは、大和の独立を後押しする何がしかの条件を餌に動かされておるのだろう。改革派の連中は、国想いの者が殆どだからな」

俺の問いに平然と静音は答えた。ナガトあたりから情報を貰っているのか？ まあ、静音も忍びなのだから相応のネットワークがあるのかもしれない。しかし、独立のために俺を殺す？ 訳がわからないな。独立したいなら大和の上層部を説得した方が早いんじゃないか？ まあ、それができないから、極端な事に走っているのだろうな。

「俺はそこまで邪魔なのか？ 何もするつもりはないんだがなあ」

俺は頭を掻きながら溜息をついた。正直なところ、何をすればいいのかわからなくてとりあえず傭兵みたいな事をしているんだ。おまけに呼ばれた目的を知っている人が何も教えてくれないとか、嫌がらせにも程がある状態なんだぞ。俺だって人間なんだよ、指し示す何かが欲しいとおもったりするんだぞ。本当、勘弁して欲しいよ。

自衛とは言っても人殺しなんてやりたくないんだよ。

「煉がそうでも、改革派の連中は煉の後ろにいる方々が恐ろしいのさ」

静音は俺の困り顔が少し面白かったのか、微笑を浮かべ言った。

「なるほどねえ。でも、情勢が傾けば手の平を返すのが殆どだろ。脅威になるとは思えないんだがなあ」

俺は苦笑を浮かべ言うとお茶をすすった。数えるくらいしか会った事がないからかもしれないが、どうにも味方になってくれるような期待を感じなかったのだ。向うからの期待はありありに感じたが、まあ、変に期待させて甘えられると困るからそんな雰囲気はださなかつたのかもしれないな。なんせアーケティカの女皇だからな。全権を持つている以上、頼って欲しくても頼るなとしか言えないのかも知れないな。

「それは冗談で言っているのか？ もし本気でそう思っているのなら、それは大きな間違いだ。煉の後ろにいる方々は煉を本気で支えようとしている方々ばかりだ。煉が疑いたくなるのはわかる。しかし、信じてやって欲しい。少なくとも女皇様は煉のためなら国を捨てる覚悟を持っておられる。それは覚えていてくれ」

苦笑を浮かべている俺を説教するように静音は少し厳しい口調で言った。言い終えると静音昇った感情を抑えるために残っていた団子を口にした。

「俺の居た世界では政治に携わる人間は手の平を返すのが当たり前なんだ。不快に感じたなら、謝る。すまない」

俺は素直に謝った。静音を不快にさせてしまったのがわかったからだ。俺にとっては他愛のない事だったんだが、こういう話題は避けておいた方がいいのかもしれないな。そう簡単に人を信じられない俺も問題だが。

「良さ。もし、煉だけでは対応できないことがあったら頼ってみると良い。結論はそのときにでるさ。話を戻そう。改革派の連中は煉の力も恐れている。場合によっては私の孤児院も危ないかもしれ

ない」

団子を食べて落ち着いたのか、お茶をすすり再び表情を陰しくして静音は話題を戻した。

「……ナガトに残ってもらおう。静音は大丈夫か？」

俺は一息おいて言った。俺にはシルヴィアや自来也が居る。ナガトはどちらかというとおまけみたいなものだろう。俺一人襲われても対応はできる。だが、孤児院はそうはいかない。ナガトや静音が居たとしても襲われた場合、被害がでるかもしれない。念のため早々に天孤様には顕現してもらったほうがいいな。

「私は大丈夫だ。なんとでもする。だが、問題は煉の方だ」

俺の言葉に静音は不適に笑みを浮かべ答えた。その笑みからすると、抱えていた荷物が少し軽くなったといったところか？ 正直なところ不安ではあるが静音を信じよう。

「俺の方は相手が魔神じゃない限りなんともなるさ」

俺は肩をすくめ言った。メガネはもう外せるからな、外せなくても遅れをとることはない。正直なところシオンという奴も実力はナガトに毛がはえた程度だろう。多少目算が甘くても構う事はない。戦闘狂っぽい龍族姉妹程ではないのは確かなのだからな。

「魔神に匹敵する実力者が居ると言ったら？」

静音は茶化すように言った。俺の軽口を諷めたいのだろう。

「匹敵するだけだろ？ それでも負ける事はないな」

静音の茶化しを煽り即答で返した。はたから見れば自信過剰なのだろうな。

「過剰な自信は命を縮める事になるぞ？」

やはり自信過剰に見えるのか、静音は俺を諷めるように言った。「別に自信と言うわけじゃないさ。神風流の使い手は絶対に負けるイメージを持つてはならない。どのような輩が相手でも勝負は水物、負ける要素なぞ勝負事においては一部でしかないって、爺さんにそう教えられたんだ。負けるイメージというのは要は後悔だろ？ 勝負しない以前にそんなもん持っても意味がない」

俺は不適に笑みを浮かべ言った。かつて爺さん、師匠に嫌というほど教えられた心構え、自信と受け取られても仕方ないが、残念な事に刷り込まれているだけであって、俺の心構えが正しいとは思っていない。ただ、自然とそうなっているだけだ。いわば、自己暗示というやつだ。

「煉、それは自信と言ってもなんら差し支えないぞ？」

そんな俺を静音は苦笑して見た。やはり、自信を持っているように見えるんだな。今の俺の中には確固たる自信というやつはまだない。状況に流されているので精一杯だ。もし、俺が自信を持てるようになるのであれば、それはこの世界で生きて行く生き方が決まった時だろうな。

「生憎だが、これは自己暗示みたいなもんだ。自信だったら俺はもっと違う性格になっているはずさ……それで、その魔神に匹敵する忍びとやらは、シオンの事か？」

静音の苦笑に肩をすくめ答え、俺は本題にうつった。

「——そうだ。恐らく、いや間違いなく煉の前に立ちはだかるはずだ」

静音は一息、間をおいて言った。その口振りから察するに今回の旅では高い確率で襲われるかもしれない。しかし、レオンも同行しているからあまり好ましい事態ではないな。まあ、襲われたときにレオンを遠ざけてしまえば問題ないだろう。

「それは良いが、確か監視がついているんだよな？ 事前に察知する事はできないのか？」

俺は以前、聞いた話を思い出し切り返した。といっても、昨日の話しなので忘れるはずもない。

「それは出来る。だが、煉に情報が行く前に監視は殺されているだろう」

静音は苦々しく答えた。監視が殺されるとはどういう意味だ？ いや、シオンは里最強の忍びと言われているくらいだ。監視についでる忍びがそれに匹敵するとは限らないということか？

「なら、監視の意味はなんだ？ まさか対象を殺すためとか言わないよな？」

俺は真意を問うため鋭く切り返した。あまり考えたくはないが、形だけの人身御供じゃないよな？ もしそうなら、里の上層部連中は馬鹿でしかない。

「それはわからぬ。しかし、監視についている者は、シオンより優秀な忍びではない」

俺の言葉に静音はさらに表情を陰くさせ苦く言った。

「つまり、形だけお目付け役として居ることか？ おまけに行動を起こそうとすれば、監視している以上、阻止しなければいけない。あんたの忍び里の上層部は馬鹿なのか？」

俺は内心で呆れて言った。言葉に感情がのってしまっていたが、気にする事でもない。誰が聞いても同じ胸中になるだろう。しかし、里の上層部は本当に馬鹿なんだな。ああ、そうか。馬鹿だから自分の里の忍びを治めることができないのか。今までの出来事から考えれば納得できる事だな。

「煉の気持ちはわかる。私も聞いた時は驚いたさ。シオンより優秀な忍びはナガトか私くらいな者だが、その両方が監視していないのだからな。おまけに監視しているのは……ナガトの妻だ」

まるで用意していたかのように静音は、重く、呟いた。静音が心痛しているのは表情を見ても明らかだった。

「——俺はどうすりゃ良い？」

その一言で俺は事態を悟った。俺はナガトの妻を救ってやらねばならない。シオンうんぬんよりそちらが優先事項なのだ。恐らくナガトも気が気ではないだろう。

「助けてやって欲しい。私にとってもナガトの妻は、由良は妹同然の存在なんだ」

すぎるわけでもなく静音は心痛を吐露するように続けた。恐らく、いや間違はなく煉耶の重荷になるのは承知の上で静音は言っているのだろう。だからこそ、胸を痛めているのかもしれない。

「どうやって助ければ良い？　今すぐシオンを片付ければ良いのか？　それとも、里を全滅させりや良いのか？　或いは、アークティカを滅ぼせば良いのか？」

攻め立てるように語気を強め俺は言った。自分でも気づかないうちに感情を高ぶらせてしまっていた。俺にとつて事態はそのくらい重要だった。自分の預かり知らぬところで自分のせいで死なれてはこの上なく目覚めが悪い。俺がもっとも嫌う状況だ。

「シオンが仕掛ける時、監視についている由良も動くはずだ」

静音は気持ちを切り替え諭すように言った。

「……もう、監視を消しているかもしれないぞ？」

俺は高ぶっていた感情を治め切り返した。

「それはない。そうなっていればナガトが何か知っているはずだ」
静音は俺の疑問を即答で否定した。監視が殺されていれば事態は別の方向に動いているという事か？

「わかった。今の時点で無事なら問題はない。俺の守備範囲にいれば救って見せるさ。なんせ、救世主だからな。だから、連絡がつけられるなら、監視をしている奴に言つといてくれ」

静音の言葉に安堵しつつ俺は冗談交じりに言った。

「無茶はするな。と、か？」

その冗談を受け取るように静音は微笑を浮かべ問い返した。

「そうだ。現時点で無茶をしているのは目を瞑っておく」

その微笑に答えるように俺は溜息交じりに言った。後でナガトにも釘を指しておくか。くだらない理由で死なれるのはごめんだ。

「……すまない」

苦労をかける。と、言いたげに静音はぼつりと言った。

「良いさ。ま、申し訳ないと思うってくれるなら、良い店紹介してくれよ？」

軽口を叩くように俺は言った。あまりに気にされても逆に困るしな。苦労事は割りとなれてきてしまっているからな。ただ、愚痴ぐらいは溢したくはなる。溢して良い相手と機会に恵まれてはいない

が……まあ、それもしかたないのだろうな。

「ああ、心得ているさ」

俺の軽口に安堵したのか、静音は笑みを浮かべお茶を飲み干した。それにあわせて俺もお茶を飲み干した。買い物はまだ始まったばかりだ。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その6（前書き）

もう少し書こうと思ったんですが区切りが良かったので掲載します。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その6

食事を終え、カフェを後にした煉耶達は市場を抜け、ギヤムジールの武具店に来ていた。ギヤムジールの店は武具以外にも旅道具とかも扱っているのか？ それとも探している魔道具の類は実はあまり市場に出回っていない特殊な部類なのか？ 疑問は尽きないが、ギヤムジールに聞けば全て分ることだ。煉耶は静音に続き店へ足を踏み入れた。店内には煉耶達以外の客はおらず、奥のカウンターに腰を掛けたギヤムジールが一人のんびりと雑誌を読んでいた。

「いらつしゃ……珍しいのう。デートか？」

カラン、カランと来店を告げる鐘が鳴り雑誌を読んでいたギヤムジールは入り口に目をやり、見知った来店者の二人に声をかけた。

「ああ。煉の買い物ついでだな」

ギヤムジールの問い掛けに静音はあっさりと返した。驚くほどあっさり返したためか、え？ と、反射的に煉耶は静音を見た。それに気づいた静音は煉耶に笑みを返した。やはり慣れていないというよりは気はずかしいのか、煉耶は頬を赤く染めた。

「ういういしいのう。それに比べうちの孫どもは……と、何か要りようか？」

ギヤムジールは二人のやりとりが羨ましいのか、茶化すように言つて、何故か溜息をついてぼやくようにつぶやいた。孫の将来でも案じているのだろうか？

「そう、ぼやくな。時期に意中の相手連れて来るだろうさ。煉耶が旅支度用の魔道具を見たいといってな。魔道具を一通り見せてやって欲しい」

ギヤムジールのぼやきに静音はさすように付け加え言った。

「食料の類をコンパクトに持ち運べる道具があると聞いてな。ギヤムジールの店で取り扱っているのは意外だったが」

静音の言葉に俺は補足して言った。武具屋と聞けば大体武器と防

具を専門に取り扱っていると思っていたんだが、色々取り扱っているんだな。

「じゃろうな。つい最近まで取り扱っていなかったんじゃよ。エミリアの趣味で始めたものなんじゃが、店に出してみたら意外と評判がよくてな。あやつは細工師にむいておるかもしれん。少し待っておれ」

ギャムジは柔和な笑みを浮かべ言うと、カウンターから立ち上がり奥へ引っ込んでいった。品物を取りにいったのだろうか？ が、間をおかずしてアタツシケースを持ったギャムジが戻ってきた。戻ってきたギャムジはアタツシケースをカウンターに置き、開いた。アタツシケースの中には小袋が数点にリュックのようなものが一点、それらに加えてコンパスのようなものやガイウスが持っていた小型端末などが収納されていた。

「今扱っているのは、こんなものなの」

ギャムジはそう言うのと懷からパイプを取り出しくわえた。

「見た目は普通のものが多いな。端末は、やはり魔道具なのか？」

俺は端末を手に取りギャムジに問い掛けた。見れば見るほど携帯電話に似ている……いや、ボタン数が違うだけで外見は同じだな。「そうだ。じゃが、そいつは協会から支給されるものじゃぞ。欲しけりや後でミレニアにねだってみると良い」

そう言っってパイプの紫煙をはくと、ギャムジはカウンターの引き出しからペンとメモ帳を取り出した。

「ところで煉耶、お前さん何処に行くんじゃ？」

パイプをくわえたままギャムジは改めてメモを取るように問い掛けた。

「サラエナ山脈だ」

俺はその問いに端末をアタツシケースに納め、ギャムジを見て言った。

「となると、片道一月くらいじゃから、食料は二月分くらいで良いか？」

ギラムジ―は思案してペンを走らせ言った。何故、食料の話になるんだ？ 俺は魔道具を買いに来たはずだが、もしか、手配してくれるつもりか？

「いや、念のため三月分欲しいが、なんでそんなこと聞くんだ？」

俺は不思議そうにギラムジ―を見て言った。その様子がおかしいのか静音は俺見て笑みを浮かべている。なんだこの既視感は？

「なんじゃ、そのつもりできたんじゃないのか？ うちフリーター御用達の準備手配店でもあるんじゃないぞ。静音から聞かなかったか？」

不思議そうにしている俺に言うと、ギラムジ―は教えていないのか？ と、静音を見た。

「――成る程、だから良い店なのか」

俺は笑みを浮かべ静音を見て言った。遠征の準備を丸ごと手配してくれる。フリーターの、個人の負担を最小限で済ませてくれる有難い店だ。是非贔屓にするべきだろうな。

「そう。この店の本当の顔は実はあまり知られてなくてな。市場を巡っていくより楽だろう？」

静音は俺の準備を見越したように笑みを浮かべ言った。流石は忍び、情報には通じているという事が、静音の有難さが身に染みる一日になりそうだ。

「……ふむ。他に要るものはあるか？」

書き終えたのか、ギラムジ―はペンを止め俺を見て問い掛けた。

「ああ、野営の道具を一式と持ち運べる調理器具とか生活雑貨の類も頼む」

ギラムジ―の問いを返すように俺は言った。

「……ふむ、馬車はいるか？」

書き終えたギラムジ―は、ペンとノートをカウンターに置き、パイプの紫煙をはきひといきついた。

「いや、徒歩で行くつもりだから必要ない。後、請求は全部協会に回してくれ」

俺が一番重要なことを付け加え言った。もしかしくなくても、請求を回されたら借金を負うことになるだろうな、食料の費用が結構かさんでいるはずだ。ミレニア、もとい協会の好意には感謝しきれないな。

「そうか。お前さんにとってはそっちの方が新鮮なんじゃろうな」
ギャムジーは感慨深げに笑みを浮かべ言った。どうやら、煉耶の胸中を理解しているようだ。

「単なるわがままなんだが、せつかく旅をするんだ。知らない景色をゆつくりと眺めながら行きたいんだ。それに馬車だといざという時にめんどくさくなるんでな」

俺は、はずかしさを誤魔化すように頭を掻いて言った。

「そんな煉の言葉を聞いてしまうと、レオンが羨ましくなるな」

そんな俺を見てレオンに嫉妬するかのごとく静音は言った。孤児院がなければ本当はついていきたいのかもしれない。

「まあ、なにせよ。準備は任せておけ。整い次第協会を通して連絡するでな」

そんな二人を見てギャムジーはまとめるように言った。

「ああ、よろしく頼む」

ギャムジーの言葉に頷き、煉耶達は店を後にした。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その7（前書き）

ちよつと多めです。まだまだ出かけませんよ……長くしすぎちゃった。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その7

煉耶達は再び市場へ向かっていた。時刻は昼近くになるうとして
いる。残っている買い物は社の件のみだ。何処へ行くかはわからないが、煉耶は案内を静音に任せのんびりと隣を歩いていた。街中は
昼近くともあつて買い物、あるいは昼休みで出歩いている人々でそ
こそこの活気がでていた。

「なあ、煉。誰を祀るんだ？」

歩きながら静音は唐突に問い掛けた。土地神と聞いても、心当た
りがない静音にとって、やはり気になってしまふのだろう。

「んー誰、か。ちよつと待ってくれ」

静音の問いに俺は眉間に皺を寄せ言った。どう言うべきか迷った
というより、本当に祀るのか疑問が沸いたからだ。

（シルヴィア、あいつは祀るという表現で正しいのか？）

静音に回答する前に俺は心中でシルヴィアに問い掛けた。こうい
う場合、本物の精霊に聞いたほうが早いだろう。

（いえ、今回の場合、降ろすと表現したほうが適切です。祀る本体
がそもそも存在しませんから）

そう付け加え、シルヴィアは煉耶の問いに即答した。確かに言わ
れてみれば御神体がないのだから祀る以前の問題だな。

「すまん、祀るのは正しくないな、神降ろし……精霊降ろしと言っ
べきだな」

シルヴィアの指摘に俺は苦笑しつつ、静音の問いに答えた。

「……そうか、ならば尚の事聞きたいのだが、誰を降ろすのだ？」

静音は表情をやや陰しくして問い返した。そんなに心配になる事
なのだろうか？

「誰、か。一応狐の姿をした獣人だったな。こっちでそういう精霊
はなんというんだ？」

俺は静音の問いに答える形で問い返した。俺の世界では稲荷と呼

んでいるんだが、こちらでは別の名称なのだろうか？

「狐……妖狐の類か？ それとも稲荷か……他に何か特徴はなかったか？」

俺の問いに静音は何かを確認するように小さく呟き、さらに表情を険しくさせ問う。静音の反応からして外見の事は言わないほうがいいかもしれないな。一応、あいつは善孤の類だしな。

「こつちでも稲荷と敬称しているのか？」

俺は確認するように問い返した。折角だから色々知っておこう。

「——ん？ ああ、そうだ。大和に限った話だが、狐の姿をする精霊は代々大和の守護者として信仰を集めているのさ。大和を治める帝の血筋も稲荷様の血を受け継いでおられると言われている。煉、この際だから言うが、私が気にしているのは煉が稲荷様ではなく、妖狐のような悪霊の類に騙されているのではないか、という点だ」そんな事はないだろうが、と、付け加え静音は言った。シルヴィアが居る以上万に一つもありえない事なのは、静音も理解しているのだろう。それでも、子供達が住んでいる以上、心配なのだろう。静音の表情の険しさがそれを伝えている。

「そうか、あいつは一応自分の事を天孤と名乗っていたが、大和ではどの部類になるんだ？」

静音の疑問に答える形で俺は問い返した。

「——天孤！？ 帝の起源ではないか！」

馬鹿な！ と、静音は血相を変えて驚いた。その声は周辺に響き、道行く人々が何事かと振り返ってこちらを見てくるくらいだ。俺は目があった人々に思わず愛想お辞儀をしてしまった。ばつが悪いとはこの事だろう。俺の態度に静音も気づいたのか、恥ずかしそうに俯き、何事もなかったように早足で歩き始めた。一刻も早くこの場から去りたいのだろう。

「……なあ、せめてお辞儀くらいしていくべきじゃないのか？」

俺は静音に追いつき問い掛けた。恥ずかしいのはわかるが、早足で去るのはさすがにないだろう。

「す、すまない。というより、煉が驚かせるから……」

まるで俺が悪いように静音は頬を朱に染め拗ねたように言った。

まあ、その表情が可愛いのは認めるが、責任転嫁は減点だな。

「そりやすまなかった。驚くとは思わなかったんでな。そんなに偉い方なのか？」

そう愚痴りつつ俺は投げやり気味に言った。

「わからん。大和を築いた方と同列ならば、高位の精霊であるのは間違いない」

静音は我に返り言った。大和を築いた稲荷と同列だから驚いたのか？　しかし、俺は名前といったんだが、位の事は特に触れていないが、精霊の場合名が位を表すのだろうか？

「まあ、とりあえず心配事はなくなったという認識で良いか？」

俺は確認するように言った。これ以上、細かい所を突っ込んでも収集がつかなくなるだけだ。静音が安心してくればそれで良い。名前とか位は、降ろしたときにも本人から聞けば良いだろう。

「ああ、我が家に天孤様が来てくださるなら、大歓迎だ」

安心したのか、静音は嬉しそうに笑みを浮かべた。

＊

市場を抜け、煉耶達は市場から北の外れにある住宅街に来ていた。レンガと石畳、洋風一色の住宅街の中にボツンと、和風の庵屋敷が建っている。静音は、その目立つようで目立たない案屋敷の目の前で足を止め煉耶を見た。どうやら、ここが目的地のようだ。

「さて、ここが目的の場所なんだが……翁は居るかな？」

そう言って静音は玄関先を覗こうと歩みでた——その時だった。

二人の目の前で、黒い影のような水溜りが湧き上ってきた。咄嗟に静音は足を止め状況を見守った。湧き上がった黒い影は数瞬もしないうちに人の形をとり、瞬く間に杖を付いた老人へと姿を変えた。

「久しぶりじゃなあ静音。逢引か？」

現れた老人は顎鬚を撫でながら問い掛けた。

「そんなところです。翁」

静音は笑みを浮かべ言った。さすがに二度目なので慣れはしたが、今のは魔法の類なのか？ それとも、忍術なのか？ やはり、目の前でそういう類のものをみると気になってしまふ。俺にも使える魔法はあるのだろうか？ あればやはり使ってみたいものだ。まあ、神風流が魔法じみているから大差ないだろうが。しかし、頭巾にちやんちゃんこか、御老公を彷彿させるな……

「ふむ。今日の下着が黒なのは、もしか、勝負下着か……の？」

唐突に翁は妙にニヤついた顔で静音に問い掛けた。その言葉に静音は絶句して頬を紅く染め俯く……おいまさか、正解なのか？ いや、そんなことよりこのジジイは何を言っているんだ？

「——あんた、面等向かって何言ってるんだ？ 当てずっぽうで言うにしても、限度つてもんがあるだろ？」

ニヤついた笑みを浮かべ、セクハラするジジイに、俺は灸をすえる勢いで睨み付け言った。殴り飛ばしてやりたいが、ジジイが死んでしまふ。まあ、ヤっちまってても文句は言われない気はするが。

「ばあか。当てずっぽうなどではない。ワシはお主らが街中を中睦まじく歩いている所をずっと見ておったわい。違うか？ 鞍佐波煉耶殿？」

「——おい、舐めんなよ。気づけないとでも思ってるのか？」

笑みを崩し、したり顔で言う翁を黙らせるように俺は即答して眼鏡を外した。威嚇でもなんでもなく、俺は何故かヤル気でいた。

「……ほう、中々良い闘気じゃな」

煉耶の圧力に翁はしたり顔を崩さずに言った。どうやら、一連の言動は煉耶を挑発するためのものだったようだ、翁の目的は一体？

「その辺にしているやってくれないか、煉？ その御方、クロガネ翁に戦える力はない」

立ち直った静音がそう言って俺を見た。俺は、やれやれ、と、溜息をつき眼鏡を懐にしまい、腕を組みクロガネ翁を見た。ちなみに、眼鏡を仕舞ったのは単に掛けなおすのが面倒くさかったただけ。目の前に居るエロジジイを監視するためじゃない。

「五年前の戦のせいだな。今の影渡りの術以外は、殆ど使えなくなつてもうてなあ……時に煉耶殿、お主、大和を治める気はないか？」

クロガネ翁は懐かしむように顎鬚をいじり、神妙な面持ちで問い掛けた。

「ねえよ。そもそもなんで俺なんだ？」

俺は即答で吐き捨てた。今度は国と来たか、こっちの人間はよっぽど俺に苦勞を強いたいらしいな。ふざけんなよ！

「本来治めるべき皇族が復讐というくだらぬ……とは、言えぬな。復讐にうつつを抜かしておるからだ。本来治めるべき人間が居らぬから、今日のような状況が生まれておる。煉耶殿のような強力な存在が現れれば、大和の問題は全部解決するんじゃないよ。変わりに煉耶殿は国という後ろ盾を得ることができる。良い事ずくめじゃな」

クロガネ翁はそう言つて笑みを浮かべた。

「……おい、エロジジイ。物には限度つてもものがあるんだよ。勿論、今のは冗談だよな？」

俺はクロガネ翁を睨み吐き捨てた。どいつこいつも厄介事を押し付けやがる。俺は聖人君子じゃねえんだよ。腹も立てば、泣きたくもなる。愚痴を溢したくもなる。そういう環境がない上に、初めから苦勞しろみたいな事を言われてるんだぞ。お前らは苦勞を強いる対価を払ってくれるのか？

「妙案だと思つたんじゃが、残念じゃ。しかし、エロジジイはやめてくれんかのう？」

クロガネ翁は残念そうに呟き、明らかに嫌そうな顔で問い掛けた。

「あんたの自業自得だろ」

その問いに俺はにべもなく即答した。

「むう。静音からも言つてくれんか？」

困り顔でクロガネ翁は助け舟を乞う様に静音に問い掛けた。セクハラした本人に助けを乞うとか、火に油を注ぐだけだろ。この爺さん、わざとやってんのか？

「自業自得ですよ、スケベジジイ」

が、静音の答えも冷たく、ジトメでクロガネ翁を見つめる。そりやそつだ。助けを乞う前に謝れよ。俺は許さないが。

「……ワシが悪かった。ところでお主等、何か用があつたんじやないか？」

二人の態度に折れたのか、クロガネ翁は頭を下げ言つと、改めて二人に問い掛けた。

「社の材料を造つて頂きたいのですよ」

俺の代わりに静音はそう言つた。しかし、この爺さんは宮大工なのか？

「社？ 規模はどのくらいじゃ？」

クロガネ翁は顎に手をやり問い返した。

「そうだな、地蔵のお堂くらいの規模といえばわかるか？」

その問いに答える形で今度は俺が問い返した。土地神の概念があるなら、地蔵もあるとおもふんだが、宗教が違うからないかもしれないな。

「——地蔵？ ……道祖神の事か？」

クロガネ翁は考えるように顔をしかめ問い返した。道祖神、か。

こちらでは地蔵の類は信仰されていないらしいな。純粹に神道のみということか？ しかし、道祖神はお堂とかに祀るもの……あるといえば、あるかもしれないな。

「んー恐らくイメージは合っていると思う」

俺は少し考え曖昧に答えた。こちらでどういう風に祀っているかわからなかったからだ。

「小規模な社殿で構成は良いか？」

俺の答えが曖昧だったためか、クロガネ翁はより分かりやい例えで問い返した。この爺さんは本当に宮大工らしいな。一先ずは信頼しても大丈夫みたいだな。

「ああ、組み立ては此方でやるからサイズの調整が出来るようにしていてくれると助かる」

その問いに頷き俺は言った。無茶な注文を言っているのはわかっている。正直なところ社殿の細かい装飾さえしっかりしていれば、後は自分でどうにかしようと思っただけくらいだ。

「無茶を言うのう。がしかし、宮大工の名折れじゃ、承ろう」

クロガネ翁は笑みを浮かべ言った。

「クロガネ翁は大和でも屈指の宮大工でな。翁に頼めば大体は要望どおりに事を運んでくれる」

その笑みの後を押すように静音は言った。屈指の宮大工か、腕には期待しておくか。

「現状、只のエロジジイだがな」

俺はわざとらしくつまらそうに言った。正直このジジイを調子付かせるとまた変なことを言い始めそうだしな……

「エロジジイは余計じゃ！　しかし、何か祀るのか？　降ろすのか？」

ムキーッと詰め寄るような勢いでクロガネ翁は言うが、直ぐに鎮火して問い掛けた。うん、このジジイ意図は分らんがわざとやってるな。

「土地神を降ろすんだ」

俺は態度を少し軟化させ言った。

「なら、祝詞も用意しといてやろう。降ろすのは煉耶殿がされるのであるう？」

再び笑みを浮かべクロガネ翁は問い掛けた。

「……そう、だな」

俺は考えるように思案して言った。考えるまでもないことだが、そういえばこの手の作法は知らないな……作法関連もこの際教えてもらうか？

「なら、大和の作法もおまけにつけておく。よくよく読んでおきなされよ？」

見越したようにクロガネ翁は問い掛けた。
「わかった」

俺はその問いに頷き答えた。しかし、本当に宮大工なのか？ それとも家系がそういう家系なのだろうか？ 疑問に尽きないが、そういうえば、クロガネ翁はナガトの祖父か？

「要件がまとまったところで、昼飯を食べて行かんか？」

昼時を察したのか、クロガネ翁は誘うように問い掛けた。

「昼飯を作ってくれの間違いじゃねえのか、エロジジイ？」

俺は不信な目で見るように問い掛けた。まあ、セクハラの罪はそう簡単に消えないもんだぞ。

「お主もしつこいのう！ ワシが美味い蕎麦を馳走してやろうというに！」

「不味いかもしれないだろう？」

エロジジイと言われるのがよほど心外なのか、クロガネ翁はつめよる勢いでキレ気味に言うが、煉耶はニヤリと笑みを浮かべ更に追撃する。もはや、只の漫才になりつつあった。

「ふつ、ふふふふ。もうその辺にしてやったらどうだ。煉、私は気にしていない」

その二人の姿に堪えきれなかったのか、静音は声を出して笑い、煉耶をたしなめる様に言った。

「おお！ 逢引はこれからが本番じゃからな。精がつくように工夫してやろう」

その言葉を待っていたかのようにクロガネ翁は目を輝かせしたり顔で言った。このジジイ完全にわざとやってるだろ、付き合う俺も俺だが、久しぶりだなこの空気。

「――前言撤回だ。エロジジイでいいぞ。煉」

が、さすがにセクハラだけは許す事はなく、静音は目を据わらせ言った。その態度にクロガネ翁は目に見えてうるたえるが、俺にはそれが演技に見えてしかなかった。特に笑どころがないが、笑っておけばいいのだろうか？

「冗談じゃよ。へそを曲げんでくれ！ とにかく、食ってゆけい」
クロガネ翁はそう言うつと屋敷へ引っ込んでいった。俺達はそれに

続き屋敷にあがった。

＊

屋敷に上がり煉耶達は居間に案内された。居間には簡素な和式の長テーブルとその四方に座布団が引かれており、更に居間の左側には日が差した縁側が見えていた。

「なんというか、自分の家に居る気分だな」

俺は適当な場所に腰をおろし縁側を見ながら言った。

「煉の家に似ているのか？」

煉耶の隣に腰をおろし静音は煉耶を見て問い掛けた。が、煉耶の顔は縁側に向いていた。

「雰囲気だな。丁度、あんな感じの縁側でよく爺さんとお茶を飲んでいたよ」

俺はテーブルに肘をついて手を顔に当て懐かしむようにつぶやいた。

「……寂しい、か？」

空気の察したのか、私ははしんみりと問い掛けた。なんとなくだが、私には煉の後姿が泣いている様に見えた。

「後悔、かな。俺が仕事を優先したばかりに爺さんの死に目にあえなかった。爺さんの口から遺言を聞く事も出来なかった……俺は、爺さんに沢山のことを貰った。俺はそれを返せるだけの事をしてやれたのだろうか、今でも思うよ」

俺はポツリと、そう答えた。爺さんが死んでからもう四年になるっていうのに、女々しいのだからな。こう縁側を眺めていると幼い俺と爺さんが戯れている風景が目に見えかぶ。忘れられない思い出だな。

「お前さんがそう思っているなら、返せてると思うぞ」

俺の問いに答えるようにクロガネ翁が盛り蕎麦と麵露を乗せた盆を持って居間に入ってきた。麵露は三つ、三人分あり薬味が乗せてある小皿で蓋がされていた。が、盛り蕎麦は一つの大きなせいろに山盛りに盛られていた。三人で摘みながら食べるのだろうか？ ク

口ガネ翁は盆をテーブルに置きそのまま配膳をはじめた。

「そうか？」

俺は盛り蕎麦の配膳を手伝いながら問い返した。

「ああ、そうじゃとも。古い先短い爺にとつて孫との思い出こそが大切な黄泉路への土産になる。まあ、同じ爺じゃかわかることじやがな」

がはは、と、笑いクロガネ翁は空いた盆を自分の後ろへやり二人の対面に腰を降ろした。

「そういうことにしとくか」

俺は微笑みそう言つて、麺露の入った猪口の薬味の小皿をどかし、盛りそばに箸をのばした。

「蕎麦を打つとついつい作りすぎてしまふんじやよ」

クロガネ翁はそう言つて盛り蕎麦に箸をのばした。静音は薬味をすべて麺露にいれてから盛り蕎麦に手をつけた。俺はつまんだ蕎麦を麺露に軽くつけすすつた……うん、蕎麦のわりに中々コシがあるな、そば粉の割合を減らしているのか？ 食べた後今度は薬味である万能葱？ のようなものと恐らく山葵と思われるものを麺露に投入して再び蕎麦を採った。

「気持ち、粗びき粉の割合をふやしてみたんじやが、どうだ？」

クロガネ翁は蕎麦をすすつた後二人に問い掛けた。

「拉麺を食べている感じがしますね」

静音は蕎麦をすすり答えた。

「そう言われると乾燥麺を使った感じではあるよな。俺はこの食感が好きだけどな」

続けて蕎麦をすすり俺は言った。無論不味くはない。むしろ個人的には美味い部類に入る。なにより、麺露が絶妙な味を醸し出している。まあ、惜しむところがあるなら、薬味を入れすぎて山葵が効き過ぎているところだろうな……鼻にくるなこれ。

「……ふむ。乾燥麺か、試してみるかのう。しかし、煉耶殿、お主山葵を入れすぎたじやろ」

クロガネ翁は何かを思案するように唸り、涙目になっている俺を見て言々と蕎麦をすすった。

「……ばれたか。この家には爺さんだけが住んでいるのか？」

俺は涙を拭き問い掛けた。しかし、俺と同じことをして静音は何故平気そうにしているんだ？ もしや、辛党か？

「ふむ。私はこの程度は辛いうちに入らないんだが、煉は辛いものは苦手なのか？」

俺の様子を見て静音は問い掛けた。なんか、俺だけ辛いのが弱いみたいな構図が出来てるんだが……

「辛酒好みの奴にはこの程度は聞かんじやろうな……この家は、ワシの倅と倅の嫁の三人で建てた家なんじゃよ」

盛り蕎麦を適当につまみ、すすると神妙な面持ちでクロガネ翁は語り始めた。俺は盛り蕎麦をつまみながら耳を傾けていた。

「倅の嫁はアークティ力出身の娘でな、結婚したのは良いがアークティ力から離れるのを嫌がってなあ。倅を散々喧嘩した挙句、その時にな、倅も意地を通してここに、この屋敷を構えたんじゃよ。移り住むならせめて家ぐらいは馴染んだものにするといつてな。ワシはそれの手伝いをさせられたんじゃよ……懐かしいのう。倅達が死んでもう五年になるというのに思い出から中々離れられんのじゃよ」

クロガネ翁はしんみりと思い出を懐かしむように言々と、蕎麦をすすった。静音は何故か黙々と蕎麦をすすっていた……黙々と食べるような雰囲気か？

「……そうか」

俺は書ける言葉が見つからずしんみりと頷き、蕎麦をすすった。多めに蕎麦を打ってしまったのは、無意識のうちに息子夫婦の分まで打ってしまったているからなのだろう。そう思うと余計にしんみりとしてしまっていた。爺さんも俺と一緒になんだな。

「……まあ、全部嘘じゃがの。因みに倅共は生きておるぞ。この家はワシの工房みたいなもんじゃ」

煉耶の反応を見て、クロガネ翁はケロっとしたり顔で笑みを浮か

べ言った。

「――げふあ！ ふざけんなよクソジジイ！ 信じた俺の気持ちを返せ！」

タイミング悪く蕎麦をすすった直後だった俺は、凄まじ勢いで逆流した蕎麦ごとクロガネ翁を睨み付けた。なんつー作り話をしやがる！ 本当、油断も隙もねえなこのクソジジイは！

「ぎゃあ！ ワシに蕎麦をぶっ掛けるとは何の恨みがあるんじゃ！」
顔が蕎麦と露まみれになったクロガネ翁は、悲鳴を上げるように叫んだ。

「てめえが変な作り話するからだろ！」

そんなクロガネ翁に、俺は昇ったボルテージを吐き出すように言葉が続けた。

「蕎麦を噴出しながら喋るのをやめてくれ。ワシの顔が蕎麦まみれになっちまう！」

既に蕎麦と汁まみれになっているクロガネ翁は懇願するように言った。無論そんな事で俺の怒りが収まるわけでもなく……

「ふ、くはははは。煉の完敗だな。はっはっはっは」

そんな俺達を見て静音は箸を止め、馬鹿笑いし始めた。端から見ればこれほど面白い光景はないだろう。その笑い声につられ、気づけば俺もクロガネ翁も笑ってしまっていた。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その8（前書き）

短い小話のはずが、何故か長くなってしまったで御座るう。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その8

買い物から一週間過ぎようとしていた。ギラムジーとクロガネ翁の準備には、相応に時間が掛かる。どちらとも俺以外にも客を抱えているはずだから、最終的にどのくらい掛かるはわからない。だが、こちらの予定としては社を建ててしまうほうが先だ。旅はその後になるな。この一週間、特にやることなく、庭先で子供達の遊び相手をする事になると思っていたのだが、まあ、肝心な物を用意するのを忘れていた。そう、天狐が宿る神体だ。これも一応用意しなくてはならないだろう。何に降りるかは見当がつかない以上全部用意してしかるべきだ。とまあ、そんなわけでこの一週間何をしていたかというと、ガイウスが住んでいる精霊の庭から木を少し調達して、ナガトに彫刻用の道具を貸してもらい、ひたすら庭先で彫り物をしていたのだ。彫刻用の道具を貸してもらった過程でやはり、クロガネ翁とナガトは血縁関係だったとことがわかった。あのエロジイの名はクロガネ・テンライというらしい。何でも二代目神雷と謳われる忍びナガトはそれを受け継ぐ三代目神雷らしい。ちなみにナガトの両親は本来の家業である神職を継いってしまったので、忍びではないらしい。道理で神道関係に通じているわけだ。まあ、そんな新しい事実を知りながら、狐の彫刻をひたすら彫っていたわけだ。俺がやり始めると何故か子供達も真似し始めてしまって、ナガトが指南役になっていたのは面白かった。しかも、特に興味を見せていたのは、やはりヨシユアだった。懐かれている証拠なのかもしれないが、懐かれるような事をあまりしていないんだよね。考えてみると他の子供達もそうだな。何故か当たり前のように接してくれた。嬉しかったが、如何してか全然わからん。まあ、考えても仕方ない事なのだろうが、この子達はきつと何かを期待しているんだろうな。その何かは俺には心当たりがある。が、それを教えるかは今のところ考えていない。あれは、本当なら教えてはならないもの

だし、俺のは特に俺で終わらせなければならぬものだ。だから……正直迷っている。まあ、急いで答えを出す必要はないからな。話を戻そう。二日程前に一応彫り物自体は完成して静音に見せてみたら、余り良い顔をされなくてあえなく作り直しになってしまった。尻尾の数が三十尾位あっても良いじゃないか、事実俺が会った時は数十尾あったんだよ。空孤に見えて縁起でもないとか、すぐくどうでもいいだろう……折角うまく彫れたのにあんまりじゃないか？まあ、やってみてあれだが、結構楽しいので苦にはならないけどな。心は少し折れたが。

「あれ？ まだ彫ってたの？」

「ん？ ああ、誰かさんが納得してくれ——その豪勢な置物は何だ？」

唐突に掛けられた声に顔を上げると、ナガトとその隣に等身大の狐の彫刻物が二体置かれてあった……全部木彫り、だよな？ 狐の彫刻物は対面を向き合うように座っている姿をしている。宮大工の孫はこんな物を作るのか？ というより何日で作ったんだ？

「え？ いや社建てるなら門番も必要かなって思ってたさ」

ナガトは気さくな笑みを浮かべそう言った。

「そりゃあつたほうが良いが、お前、それどのくらいで完成させたんだ？」

俺は驚きが混じりながら問い掛けた。確か社を建てるって話をしたのは一週間前のはずだ。俺が彫刻を始めたときについてに教えたんだからな。それから作ったとしても、できるの早すぎないか？

「大体三日くらいだけど？ まあ、影分身があるからね。この位のものなら直ぐに出来るよ」

ナガトは笑みを崩さず言った。三日？ いやいや、出来ねえだろ。おかしいだろ。なんという神業だ。さすがに、これは俺も脱帽するしかない。

「宮大工の孫がなせる業か？ 神体もお前が彫ってくれないか？」俺は冗談まじりにそう言った。なんというか、開いた口が塞がら

ないとはこういうことをいうのだろうか？ 別の意味で心が折れたぞ。

「いや、それは煉耶が彫った方が良いよ。出来が悪くても絶対彫るべきだ。僕は違う部分を手伝うよ。この置物みたいにね」

そう微笑を浮かべナガトは言った。

「まあ、冗談だ。しかし、それを見せ付けられると、さすがに心が折れるな……」

俺はそう言って苦笑いを浮かべた。

「燃えてきた！ とかじゃなくて？」

俺の苦笑いが可笑しいのか、含み笑いをしつつナガトは問い返した。

「おいおい、実力差が違いすぎるだろ。こんなもん見せ付けられたら、燃える心も炭に還るぞ」

俺はそう言って笑った。まあ、比べても仕方ないしな。巧く彫れるよう念じながら彫るとしますか。

*

結局あれから三日程かかって神体はとりあえず完成した。三尾の尻尾をもった狐のような置物といった方が正しい具合の出来ばえだが、個人的には狐に見えるので良しとしたい。静音達も特に文句はなかったみたいだ。暇時にはちよくちよく彫り物をしてみるか。意外と楽しかったしな。まあ、図書館でひたすら読書するよりかは建設的？ でもないか。ともかく神体は完成したが、また暇になっってしまったな。社の準備もまだ掛かるだろうし。折角だ、ガイウスにこの前の事を聞きに言ってみるか。そう決め、身支度を整え部屋を出た。部屋を出ると、タイミングよく静音と出くわした。

「出掛けるのか？」

丁度、出くわした俺を見て静音は問い掛けた。片手に洗濯籠を抱えているところを見ると洗濯物をこれから干すところだったのだろうか？

「ああ、ガイウスの所にいつてくる。洗濯物、干すのか？」

俺は静音の荷物に目をやり問い掛けした。

「ああ、良い天気だからな」

静音はそう言って笑みを浮かべた。静音の言葉につられ庭先に目をやると、シルヴィアが子供達をじゃれていた。

「手伝おうか？」

どうせ暇だし、と、付け加え俺は言った。

「いや、大丈夫だ。ガイウスのところに行くなら、言伝を頼まれてくれるか？」

静音は笑みを崩さず問い掛けた。

「かまわないが、何か預けているのか？」

静音の言葉に俺は視線を戻し問い返した。武具の類でも預けているのだろうか？

「そんなところだ。ガイウスには、例の物を返してくれと伝えてくれれば分かるはずだ」

静音は一瞬だけ笑みを崩し誤魔化すようにいった。

「わかった」

この場で濁す必要があるものなのだろうか？ 一体ガイウスに何を預けているのだろうか？ 少し疑問が沸くが、俺は特に気にせず頷いた。ガイウスに伝えればわかる事だろう。

*

孤児院を出て俺は精霊の庭に来ていた。前に材木をわけてもらいに来たときもそうだが、この森には精霊は住んでいないのだろうか？ 精霊の庭と名がついているからてつきりシルヴィアのような管理している精霊が居るもんだと思っていたんだが、そういう気配もない。もしか、ガイウスが精霊だったりするのか？ まあ、ありえないだろうな。何か特別な理由でもあるのだろうか？ 今日ついでに聞いてみるか。俺は森を歩きながらガイウスの工房を目指していた。といっても工房自体が森の入り口近くにあるので対して時間がかかるわけでもない。しばらくしてガイウスの工房が見えてくると俺は遠慮なしに工房であるガイウスの庵に入ってしまった。中に入る

とみぎてに鍛冶場がありその壁側に奥へ続く扉とひだりてに囲炉裏座敷が併設されていた。だが、肝心の工房の主であるガイウスが見当たらない。出払っているのだろうか？

「――ガイウス、居るか？」

俺は確認のため比較的大きな声で呼ぶようにいった。そうすると、気づいたのか一息置いて、奥の扉からガイウスがやってきた。もしや、仕事でだったのだろうか？

「仕事中……だったか？」

俺は少し申し訳なく思い確認するように問い掛けた。

「いや、違うが。珍しいな。どうした？」

ガイウスは珍しそうに笑みを浮かべ問い返した。

「暇だったんでな。遊びに来た。じゃだめか？」

ガイウスの笑みに俺は、はにかむように笑みを浮かべそう問い返した。

「駄目じゃねえよ。むしろ大歓迎だ。そうだな、茶でも入れるか」

ガイウスは笑みを浮かべたままそう言う座敷に向かった。煉耶もそれに合わせて座敷へ足を向ける。座敷に上がり、二人は囲炉裏を囲い向かいあうように座った。ガイウスはやかんを囲炉裏にぶら下げ二人分のカップを用意し始めた。

「ちよいと時間はかかるが、砂糖とミルクは使うほうか？」

カップを用意し終えたガイウスはそう問い掛けた。問いかけからして茶はコーヒーの様な物なのか？

「どんな飲み物なんだ？ 参考までに聞かせてくれ」

興味ありげに俺は問い返した。

「カフェインっていうこちらじゃ趣向品みたいな飲み物だな。味と香りを楽しむ茶みたいなものだ。飲むと眠気を抑えてくれる効能があつてな、こつちじゃ結構日常的に飲まれているものだ」

着々と準備を進めながらガイウスは答えた。用意したカップにフィルターのようなものを置いて更に複数種類の茶色の粉末を少しずつ入れている。ブレンドしているのか？

「ああ、なるほど。コーヒーの事が、一応両方頼む」

ガイウスの説明で茶が何か想像できた俺は、内心出てくるコーヒーが楽しみでそう答えた。

「わかった。そういや、そっちじゃそう呼ぶんだっただな」

ガイウスは思い出したかのようにそう言った。

「知っているのか？」

知るはずの無い事を何故知っているのか？ 俺は興味ありげに問い掛けた。もしかして、爺さんが何かしたのか？

「この茶を流行らせたのは、他でもない英剣なんだぜ？」

ガイウスは懐かしむように笑みを浮かべ言った。

「——そうなのか」

俺は一瞬間をおいて微笑を浮かべ言った。爺さんは戦争以外にも世界に貢献していた。それが少し誇らしく、なにより嬉しかった。

「ああ。つと、何か用件があつたんじゃないのか？」

カップの準備を終えたガイウスは視線をやかんにうつし改めて問い掛けた。

「そういえばあつたな。静音が例の物を返してくれだそうだ」

その問い掛けに俺は思い出したように言った。今が時まで忘れかけていたのは、秘密だ。

「——ほう、あいつがとうとう引き取る気になつたか。わかった持つてこよう」

そういうとガイウスは立ち上がり奥の部屋へ向かつて行った。武器の類なのだろうか？ そう思案しているうちにガイウスが手さげバック程度の小さなアタッシュケースを持って帰ってきた。

「こいつだ。静音の家に代々受け継がれている籠手だ」

そう言つてガイウスは煉耶にアタッシュケースを差し出した。

「なるほど家宝というやつか」

そう頷き俺はガイウスからケースを受け取った。

「色々あつてな。整備がてらに預かつたままだつたんだよ」

温まつたみたいだな。と、ガイウスはやかんを見ながらそう言っ

てやかんを囲炉裏から取り出した。

「そうか」

俺はケースを横に置き頷いた。まあ、人の過去なんぞ気にしても意味はない。不毛なだけだろう。

「なんだ、理由は聞かないのか？」

ガイウスはカフィの淹れている傍ら問い掛けた。お湯がフィルタ―に注がれると香ばしい香りが漂ってきた。本当にコーヒ―の香りだな。

「ん？ 人に歴史ありってね。つまらない事を聞くほど野暮じゃないさ」

些細な事だと、言うように俺は答えた。まあ、必要になれば本人が話すことだ。繰り返すが、こちらから聞くことじゃない。又聞きであつてもだ。

「……そうか」

ガイウスはそう頷くと淹れ終えたカフィを差し出した。カフィを受け取ると勢い余ってそのまま一口飲んだ。

「……美味しいな」

そう言つて、また一口飲んだ。既にミルクと砂糖は入っているためか、カフィ独特の濁りとほんのりとした甘味を感じる。カフィ独特のほろ苦さから考えると、ミルクだけでよかったかもしれないな。今度はブラックで飲んでみたいもんだ。

「巧く淹れられたようだな」

ガイウスは安心したように言うとかフィを啜った。

「ところで、ここには精霊はいないのか？」

森全体がマナが豊富な理由が知りたく、俺は世間話程度のもりで問い掛けた。

「居ないが、どうしてだ？」

どうした？ と言いたげにガイウスは問い返した。

「精霊の庭と言われているからには、管理している精霊がいるだろうと思つてな。いないのか？」

さらに興味ありげに俺は問い返しカフィを啜った。

「——ああ、その事か。一応ここは俺の土地でな。登記した時にその登録したんだよ」

ガイウスは拍子抜けしたような口振りでそう言った。何か、重要な話とでも思われたのだろうか？

「そうなのか。しかし、随分マナが豊富だな」

ガイウスの答えに俺は肩透かしを食らったような気で言った。それにしても、他の森とは印象が違う感じがするのは何故だ？ どちらかというとかイエスブルグの雰囲気に近い感じがする。

「まあな。そっぴや、数日前森に悪さした奴が居たみたいだが、心当たりあるか？」

俺の言葉にさらに思い出したようにガイウスは問い掛けカフィを啜った。

「間違いなく俺だな。ちよつと材木が欲しくて拝借しに来た」

まずかったか？ と付け加え俺はそう答えた。

「なんだ、お前だったのか。別に構わないが、あんまりおっぴらにするなよ」

ガイウスは念のため釘を指すような口振りでそう言った。何かわけがあるのだろうか？

「どうしてだ？」

俺は理由が気になりそうと切り返した。大した事では無い口振りではあるが、荒らされてはいけない理由があるようだ。

「……ここはな、旧大戦の折、俺とゼノスが討ち取った神族や魔神が眠っているんだよ。厳密にいうと、隣の部屋に、だがな。封印している神族や魔神がかなり居てな。そいつらが垂れ流すマナの影響で森がこれだけ育ってしまったているんだ。ここはそいつらの安らぎの庭でもある。露骨に荒らすと神族どもが臍を曲げて面倒な事になりかねん」

ガイウスは溜息を吐きさらに頭を掻きそう答えた。その溜息が誰に向けられているのかわからないが、少なくとも目の前の煉耶に向

けられたものではないようだ。ガイウスにとっては神族達の問題は悩ましいものなのだろうか？

「霊園なのか……すまなかった。ちょいとばかりマナが豊富な材木が必要だったんだ。精霊を宿す神体をつくるためにな」

言い訳がましいが申し訳ない口振りで俺は言った。霊園のような位置づけの森ならば、確かに荒らされるのは困るだろう。眠っているのが神族や魔神なら尚更だ。下手に怒りに触れれば祟り程度では済まされないかもしれない。

「いや、先にも言ったがその程度ならなんら問題はない。大量に採らなきゃいいんだよ。悪かったな。嫌な言い方して」

ガイウスは、すまん、と言いたげな口振りで言っと、またカフィを啜った。

「別にいいさ。安易に荒らしたのは事実だ」

気にして無い。と、付け加え俺はそう言った。今度から拝借するときは断ってから拝借するようにするか。

「ま、今のことは頭の片隅にでも覚えておいてくれ」

念のためにな。と、付け加え、ガイウスは言った。

「わかった。ところで聞きたい事があるんだが」

俺は話題を変えるようにカフィを啜り言った。

「どうした？」

空気が変わったことを察知したのか、ガイウスは少し表情を引き締め、問い掛けた。

「——エルフは世界でガイウス一人なのか？」

俺は一息間を置いて、そう問い掛けた。天孤の言葉の真偽を確かめるためだが、本当ならレイルに聞いた方がいいのかもしれない。現時点では恐らく教えてくれないだろうが。

「……どうしてだ？」

俺の問いにガイウスは何かを確認するように問い返した。俺の疑問の理由を知りたいのだろう。

「ちよっと前に元獣人の精霊に会ってな。世界がおかしい事に疑問

を持て見たいな事を言われた。で、その過程でエルフが一人しかないとその精霊が言っていたんだよ。それが気になって確認しにきたのさ」

俺は軽い口振りですう言っただけカフィーを啜った。

「——なるほどな。しかし、人の過去は詮索しないんじゃないのか？」

俺の言葉に納得したのか、ガイウスは意地悪い笑みを浮かべカフィーを啜った。

「それとこれは問題としては同じだが、俺としては聞かなきゃならん事だ。まあ、話したくないなら無理にとは言わない」

俺は片をすくめそう言った。ガイウスがワザとそう言っているのが目に見えてわかったからだ。

「ふ、冗談だ…… エルフが俺一人なのかは、正確に言えば、わからない」

俺の言葉にガイウスはふっ、笑みを浮かべきり出した。

「……そうか」

俺は話を促すように頷き言った。しかし、わからない、か。隠しているわけでもなさそうだから、本当にわかっていないのだろうな。「神魔戦争の時もだが、それ以前に俺達エルフは結構大規模な戦争を経験している。その過程で実は部族自体が散り散りになってな。

俺が物心ついた時に俺の両親は戦争で死んだ。それから俺は鍛冶と腕っ節を鍛えながら同族を探して世界を放浪していたんだ」

ガイウスは昔話をするように言葉を紡ぎ、カフィーを啜った。

「ゼノス・デュランダルと出会ったのもその時か？」

俺はもう一つ気になっていた事を問い掛けた。恐らく、五十年前戦争にリンクする話だろうから、当然、ガイウスとゼノスが出会っていてもおかしくは無い。

「そうだ。丁度、俺が世界をくまなく探し終えてエルフが一人しか居ないと絶望して、総てを投げ捨てようとしていた時だな」

何処か懐かしむようにガイウスは言った。しかし、一人だとわか

る、か。堪えただろうな。

「……まあ、世界でたった一人は、つらいな」

俺は何を言ったらよいかわからずそう言った。初めから一人だとわかつているのと、たった一人だという事がわかるのは、大分違う。心理的には後者の方が堪えるはずだ。

「ただな、今だから言えることだが、もしかしたら人間に混じってしまっているんじゃないかってな。俺達エルフは本来耳が長いとか、鼻が高いという外見的特徴があつたんだが、管理者の馬鹿共が人化の法という制約を掛けてしまつて、外見上の区別がわからなくなつたんだ」

ガイウスはもう気にしていないのか、あつさりと言葉を続けた。

「一種族を、それだけで消せるもんなのか？」

ガイウスの言葉に俺は懐疑的に問い返した。幾ら人に似せたからと言つて一種族をそう簡単に消失させる事が可能なのか？ 見た目が変わるうが種族としてまとまっていれば残るものだと思うが、エルフの文化とか歴史自体を消してしまわない限り消滅させる事は無理なような気がするが、当時の管理者達は何を想つてそんな事をやつたのだろうか？ 天孤達、獣人達の件にしる向無茶苦茶ではないか。世界を管理する立場だから好き勝手にやつて良いわけが無い……はずなんだがなあ。

「何世代も交えればなくなる。たまたま俺の両親がエルフである事を最後まで貫いたから、俺はエルフという認識でいられているだけなのかもしれない」

何処か感慨深げにガイウスはそう言葉をまとめた。

「そんなもんか？」

ガイウスの言葉に俺はいまいちピンと来なかった。受け継ぐ文化や歴史が残っていれば種族として残りそうなものなんだが……語り継ぐものが居なければ、風化して別の何かになるという事、か？

「そんなもんだ。言つておくが、俺達は外見を除けば、特別長寿なだけで、独特の高等な言語を喋れるとかそんな大層なものもつて

いない。従って今のところわからないとしか言いようがない」

俺の反応にガイウスは笑みを浮かべ言った。不思議そうにしている俺が面白かったのかもしれない。

「そうか。千年単位で生きているガイウスでも、わからないことがあるという事か」

俺はそう言ってカフィをすすった。余り身のある話ではなかったが、世間話には丁度良かったかもしれない。やはりレイルを問い詰めるしかない。が、今はまだそのタイミングでは無いだろう。詰め寄って、のりくらりとかわされても意味が無い。

「おい、俺はまだ千年いきてねえぞ。八百年くらいだ。ああ、後二百年もすればハイ・エルフになるな」

歳を間違える、と、言いたげにガイウスは非難の声をあげた。しかし、ハイ・エルフ？ 高レベルのエルフか？ わけがわからん。青年期から壮年期入るようなものか？

「なんだそりや？ 特別な能力でも授かるのか？」

俺は顔をしかめ問い返した。

「そんなものはない。形式みたいなもんだ。ああ、体内のManaが潤沢になるくらいの特典はあったな。ともかく、今のところエルフは俺だけだ。ひよつとしたら世界の片隅に位相をずらしてコロニーを構えてたりするかもしれないが、探しようがない。事実を確認しなければ、レイルに聞け」

俺の反応が微妙だったのか、つまらなそうな口振りでガイウスは投げやり気味に言った。

「聞いても教えてくれないだろうな。だから直接聞きに来ただけだな」

その子供っぽい反応に呆れつつ俺は肩をすくめ、そう返した。

「微妙な答えですまなかったな。だが、疑問を持つこと自体悪い事じゃない。特にお前は一層疑わないと駄目だ。それとさっきの馬鹿共はレイルの事じゃねえからな」

レイルには言うなよ。と、仏頂面で念を押すようにガイウスはそ

う付け加え言った。

「その辺は胸に閉まっておくが、俺が別世界の人間だからか？」

その反応に俺は涼しい顔をして問い返した。まあ、ガイウスの名譽のために面白い状況がきたらばらすとしよう。

「そうだ。異世界の人間だからこそ、世界に染まるんじゃなく、自分を貫いてほしいのさ。そうすることでこの世界の悪い部分を駆逐することが出来るはずだ」

何故か説教する口振りでガイウスは言った。何時の間に説教になったんだ？ 話を横におきやがったな。

「俺に問題定義の発端者になれと？」

ガイウスの話題そらしに俺は呆れつつ問い返した。というより、面等向かって貧乏くじを引けはないだろう。

「有体に言うとそうだが、お前自身のためでもある」

ガイウスは涼しい表情をしてカフィをすすり言った。

「あんた地味にひでえ事頼むんだな」

ガイウスの言葉に俺は、何故か飲み干したカフィが一層苦く感じた。爺さんとゼノスつながりの人間は本当碌な事を頼まないな。

「ま、それが世界のために、お前のためになるからな」

ガイウスはそう言っているとカフィを飲み干した。

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その9（前書き）

んー年末までには書き上げたいな・・・

心折れた女神と気高き心を持つ青年 その9

アタツシケースを片手に孤児院に戻ると、孤児院の入り口傍に社の材料を積んだ荷車が置かれていた。時刻は既に夕刻を過ぎようとしている。何だかんだで大分ガイウスの所に入り浸ってしまっていた。組み立ては明日からだな。そう思い俺は孤児院の中へ入った。中へ入った。リビングに顔を出すと既に静音達と子供達が夕飯を食べていた。

「ただいま、皆」

顔を出した俺は食卓を囲む皆に笑みを浮かべ言った。

「煉兄、お帰りー」

「おかえり、煉。夕飯はどうする？」

マツクスの言葉に続き静音は席を立ち、煉耶に問い掛けた。

「良いよ。そのまま、適当に何か作るさ」

席を立った静音に俺はそう言って、アタツシケースを差し出した。

「――すまないな。ありがとう」

一瞬、何かに気づいた素振りをしてアタツシケースを受け取ると、静音はそう言って再び席に座った。

「ナガト、明日から頼むな」

静音が受け取ったのを確認すると、俺はナガトに視線を移して言った。

「うん。わかった」

夕飯を食べつつナガトはそう頷いた。

「兄ちゃん、何作るのー？」

ナガトの隣に座っているアレクが興味ありげに俺を見て問い掛けた。

「父様、何作るの？」

それに続いて、さらにその隣に居るヨシユアが俺を見て問い掛け

た。二人とも阿吽の呼吸で俺を見つめる。

「それは、明日の楽しみかね」

そんな二人に俺は茶化すように言った。煉耶の言葉に二人は不満げに顔を拗ねらせた。

「拗ねても何もでないぞ？」

そんな二人に俺は笑みを浮かべに言うと、キッチンへ向かった。自分の夕飯を作らねば……

＊

翌朝、表の置いたままだった荷車を庭へいれ、荷解きを始め、社の組み上げの準備に入った。縁側に目を向けると子供達が興味津々に俺達の様子を覗いている。ヨシユアやアレク、マックスはともかく、リアとエミリーまで覗きに来ているな。何だかんだで皆気になっているという事か。

「煉耶、図面とかあるよね？」

荷解きを終えたナガトは確認するように問い掛けた。

「勿論ある——俺の頭の中にな！」

ナガトの問い掛けに俺は茶目つ気たつぷりにそう返した。すっかり書くのを忘れていたのは言うまでも無い。

「……殴るよ？」

イラッときたのか、ナガトは目を据わらせそう問い返した。そんな冷たい反応しなくても良いだろう。

「すまん、紙とペンをくれ」

俺は苦笑交じりに軽く謝り言った。その反応に溜息混じりでナガトは紙とペンを懷から取り出し差し出した。俺はナガトから紙とペンを受け取ると二間四方の大まかな社の図案を描いた。大きくしても、子供達の遊ぶ場所が無くなってしまっからな。なるだけ小さく、天狐が納得しそうな感じに描いて見たが、ナガトはどう見るだろうか？

「こんな感じでどうだ？」

描き終えた俺は、ナガトにペンと一緒に図案を渡した。図案を受

け取るとナガトは額に皺を寄せ図案を睨むように見た。

「……」

ひとしきり見終えたナガトは図案から視線をはずして、次に荷解きをした荷車に近づき社の材木を見始めた。

「……」

さらにひとしきり、ナガトは材木を見終えると、今度は庭一体を見始めた。

「どうだ？」

重い沈黙のまま俺は気さくに、空気を変えるようにナガトに問い掛けた。それだけ集中している事なのだろうが、この空気は少し重過ぎた。

「——あ、ごめん。ちょっと集中してた。図案どおりでも良いけど、気持ち小さめにした方が良いと思う。どうする？」

ナガトは我に返ったように俺を見てそう言った。

「なら、そうしてくれ」

ナガトの答えに俺は二つの意味で了承した。細かい部分はナガトに任せたほうが確実だからな。この前の木彫りの門番がそれを語っている。ナガトは忍びだか、それ加えて一流の宮大工であることは、疑う余地が無い。まあ、ひよっとしたら只の木彫り職人かもしれないが、さっきの雰囲気総てを語っている。

「わかった。なら、設計に取り掛かるよ」

後、これ読んで。と、ナガトは俺に近づき三枚のお札見たいなものを差し出した。ああ、祝詞集か？俺は受け取り見てみた。一つは大祓詞と書かれた祝詞文、もう一つは稲荷祝詞と書かれていた。最後の少し集めの文は、祭儀の作法についてまとめられた文だった。俺は、縁側に座り、中身を見ようとひらいた。それとほぼ同時に――

——臨・兵・闘・者・影・身——忍法・多影分身！

と、ナガトは印を結び、9体の分身を呼び出した。材木に筆をいれるんだよな？あの門番も同じように彫り上げたのだろうか？多分、そうなんだろうな。俺は心中で一人納得して視線を作法の文

に目をうつした……改めて言う事でもないが、すごいんだな、忍者
って。

*

ナガトの作業が終わるまでの間、俺は作法の文、いや、文集を読み耽っていた。しかし、この世界の神事の作法は前の世界と殆ど変わらないな。もしや、世界共通なのか？ そうなら、どうやって伝播したのだろうか？ 別の意味で興味が沸くな。調べようは、ないだろうが。そうになると、やることは前の世界と殆ど変わらないな。問題は、祝詞を上手く読めるか、だな。まあ、やるしかない。と、煉耶が思案していると、庭先に一人の女性が入ってきた。

「何をなさっているのですか？」

入ってきた女性は、縁側に腰を掛け、文集を読み耽っている煉耶に近づきに問い掛けた。

「——ん？ 神事の作法を……何の用だ？ 神風流は教えないぞ、
黎香殿」

唐突に声をかけられ、顔を上げた煉耶はしかめっ面でそう言った。

「……理由をお聞きしてもよろしいですか？」

黎香は藪から棒に言われたことに苦く、複雑な面持ちで煉耶に問い返した。

「秘伝書、読んだんだろ？ だったら、教える事なんて一つもないぞ」

俺は視線を文集に向けたまたそう返した。秘伝書の内容は知らないが、神風流はマナの制御法について説いている武術だ。別に俺が受け継いだ武の型なんて、正直知らなくても良い。

「そんなはずはない！ 貴方が学んだ神風流独特の型があるはずですよ」

黎香はヒステリックに金切り声をあげ叫んだ。黎香の金切り声に驚いた子供達とナガトが煉耶達視線を向けた。そんな金切り声をあげて叫ぶ事じゃないだろう。

「……えっと、準備終わったけど、お客さん？」

既に分身を解き、一人に戻ったナガトは控えめに問い掛けた。

「すまない。アレク、マックス、ヨシユア。ナガトを手伝ってやってくれないか？」

ナガトの問いに俺は子供達を見てそう問い掛けた。煉耶の言葉に三人は、わかった！。と、頷きナガトの傍に集まった。それにつられ、何故カリアとエミリーもナガトの傍に近づいていった。どうやら、子供達は皆手伝いたかったようだ。

「じゃあ、作業進めておくよ」

俺の意図を理解したナガトはそう言っ、子供達に大工道具の使い方をレクチャーし始めた。

「ところでナガト、静音はどうしたんだ？」

俺は、ここにもいてもおかしくないもう一人の人物について問い掛けた。朝から見かけてないが、出かけているのか？

「ん？ 水ごりの準備してるみたいだよ」

ナガトはこちらに背を向けたままそう返した。

「……そうか」

ナガトの言葉に俺は曖昧に頷いた。水ごりを用意する理由がよくわからない……。もしや、降ろす時のためか？ 祝詞を捧げるのに水ごりをして身を清める必要はないんだけどな。まあ、良いか。別件で必要になるかもしれないしな。出来ればしたくないけどな。

「すまない。確かに先代から受け継いだ型はあるが、それは俺が受け継いだ物であって、他人に教えるものじゃない。俺の受け継いだ型は俺が三代目だから受け継いだんだ。仮に教えるとなれば、それは、四代目に受け継がせる時だ。剣術を学びたければ、あんたの後ろに控えている人から学んだ方が俺よりもたになるんじゃないか？」

俺は改めて黎香に振り向き、軽く謝罪すると溜息混じりに問い掛けた。幾ら気配を消していても、俺の探知から逃れる事は簡単には出来ない。早々に引き取って頂けるよう護衛の方にも出て来て貰おう。

「——えっ？」

「はっはっはっ。やはりばれていましたか。鞍佐波殿には敵いませんな」

驚いて振り向く黎香を尻目に、高らかに笑いながら一人の女性が現れた。女性は大和の戦装束なのか、煌びやかな武者鎧に青竜刀のような刃を持った等身大の槍を片手に持っている。護衛というには重装備すぎる装備だ。女性は柔和な笑みを浮かべたまま黎香の隣に立った。

「姫が迷惑をかけ申しわけござらん。姫は復讐に目を眩ませ、足元しか見てない故、どうか気を悪くしないで頂きたく存ずる」

女性は笑みを崩さず軽く頭を下げ言った。

「何故貴方が謝るんだ？」

俺は決まり文句を言うようにそう問い掛けた。どうやら、侍の様だな。さしずめ主君の責は臣下の責といったところか？

「我が姫はへそ曲がりしてな。謝ると言う言葉を知らぬのでござるよ。だから、代わりに某が謝るのでござる。某は、姫の忠臣故」

女性は笑みを崩さず、黎香を見て言った。

「伊那！ 私は別に謝るような事はしていない」

笑みを浮かべている伊那に怒り散らすように黎香は言った。どうやら、蚊帳の外に出されそうな雲行きだな。

「またそれでござるか、姫。人を不快にさせといてそれはないでござろっ」

伊那は溜息混じりに困ったような笑みを浮かべ言った。まあ、なんだ。笑みは崩さないんだな。

「大体私は護衛なんて頼んでいない。もう、私の事はほっといてくれ」

伊那の言葉に吐き捨てるように返すと黎香は顔を暗く曇らせた。思い出したくない何かを思い出したような、そんな暗さを感じる表情だ。

「それは出来ないでござる。亡き先帝様や、散っていった守護摂家

衆の者共に約束したでござるからな。もし、某のお付がどうしてもお嫌というのであれば、某を、その手で殺してくだされ」

その表情を見て尚畳み掛けるように伊那は笑みを崩し、厳しく睨んだ。まるで、逃げるのをやめろと言いたげに。そんな二人を見て俺は仲裁に入らずこの場を離れる事を決意した。まあ、会話の雲行きが怪しいが、まあ、二人の間に俺はもういないだろう。正直構ってられないしな。俺はナガト達の作業に混じるためにその場からすつと離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5335o/>

軋み始めた歯車（ 救世主始めましたシリーズ続編

2011年10月31日02時27分発行